

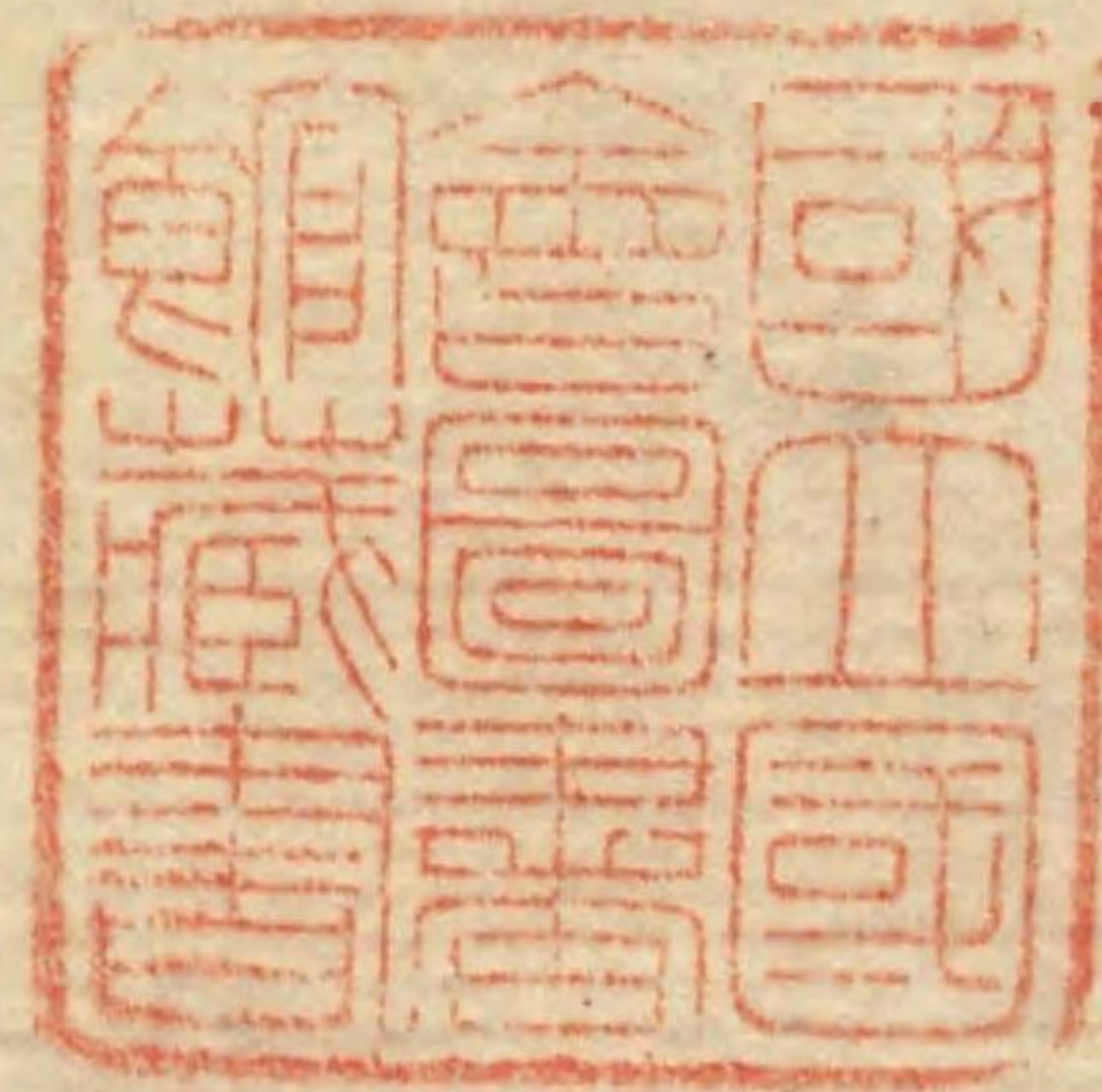
增補雅言集臨見

十五

813.6
I 619g
N28



813.6
I 619g
Nn



691331

増補雅言集覽卷之十五

石川雅望集
中島廣足補

○加の部

かぬ 兼。カヌ○カヌル○カチテ兼帯の心可考事カチテ
前ピロの心カチテシニクキ事共別に出す

かゝる 借(後撰)中「朝ごとにおく露袖にうけためて世のうき時の涙にぞかる(古今)

夏よみ人「聲ハいて涙ハみえぬ郭公わが衣手のひづをからかん(新六)六行 秋風

のさむさよいをぐあづはたをかりて野はらの虫もおるら(万)廿五「みつほなす

かれる身ぞとれあれ、ともなほしねがひつちとせの命を

かる 刈(式)八、十六月晦大祓天津管曾平本薊斷末薊切氏(古事記)七下天田あまたを加流

をどめ云々(古)秋下よみ「かれる田におふるひつちのほに出ぬハ世を今更に秋

はてぬとか(神紀)下刈此云我里(古)戀五よみ「うきめのみおひてあがる、うら

かれはかりにのみこそあまのよるらめ(拾遺)戀三「住吉の岸を田まほり蒔と稲の

かるはさまでもあはぬ君かな(万)五、十「いらこの島の玉藻かりをを(同)六同十あさか

の浦に玉藻かりてな(源紅葉賀)廿三「君こはたなきの駒に刈かはんさかりすぎた

るまたばかりども(夫)廿二順徳院「かりてはすみつのみまきの夏草のまけりにけりな
駒もまきめせ(源としひめ)廿九あや「さき舟どもに柴かりつみ(新千)秋下「さをもか
のつまこふ岡の霜がれてからぬわさたにのこる秋風(拾)秋維「秋ごとく刈つるいね
いつみつれと老にける身を置どころなき(後撰)二戀「我門の一むら薄かりかはん君
が手おれの駒もこぬ哉(玉葉)旅俊成「舟とむるみつのみまきのまきも草からでかり
ねの枕にぞしく(夏)訓しき

か。馬をも獸をも(夫)十八房家集「もろかへりしとる馬、ききあてまなづの原
をかるやたゞ子を(拾遺)五戀「人丸」「あらちをのかる矢のさきまたつ鹿、
はかり物の思はト(新六)二知家「草よ入つかれの鳥をかりたてよかたの、みのりけ
ふくれぬども右借、刈狩下の離枯カリと動くかれるのかりける也カル、とい
いずカレテカレヌなど動くカル、といひてカレルといはず

か。離(六帖)上六「おも枕たかせのよこよかる菰のかるともわれいらいらでたのまん
(古)六帖上「我またぬ年ひきぬれと冬草のかれよ一人のおとづきもせき(い
せ物)十九「たぢなりける人を相あたりたりけるほどもおくかきあけり(古)六帖
「山さとい冬ぞさびさきさきりける人目も草もかきぬとおもへば(源わか紫)四十

年比の蓬生をかれなんもさきがが心ほそう云々(六帖)上五「見るめなきわが身をう

らとあらねをやかれあであまの足たぬくゝる(いせ物)四十雜「今ぞくるくる
いき物と人またん里をバかれせとふべりり(万)十九郭公「郭公さきどもありせあ
みとりよとりてあづれあかれせかくとも(後撰)秋(六帖)上(大和物)「秋萩をいろそ
る風ひふきぬとも心のかれト草葉ならねバ(源)三十「わきかくて草のいほり
いあれぬとも此一ことのかれトとぞ思ふ(六帖)下五「かぞ人のかれてつれあき下組
のとけはゆはんといひて一物を(千載)秋住侍りたる山里をまそ一外し侍りて歸り
たりたるよ前裁のいたくををれたりねバ云々小「宿りれていくらもあらぬよ鹿
のさく秋の野べともありあたる哉(源)三十「いりからん世ありかれせんなが
き世のちぎりむをべる草のいほり(同)句宮四「我世にあらん限りどに此院あらさ
きほとりの大路をさかれはつまどうと覺一の給はせて(六帖)上六「今のはやりれば
てなま一草の根のもえてもつひに春にあへるりも(同)同(古)戀四「かきはてん後を
ばいらで夏草のふりくも人のおもほゆる哉(源)末二廿「六條わたりにどにかれ
まさり給ふめれば(古)戀五業平の朝臣相ありて侍りたるをかれがたよかりにければ
(後撰)夏云々三條右大臣少將に侍りける時忍びにかよふ所侍りたるを云々少將の
かれがたにて侍らさりねれば云々(同)別いせへまかりける人云々名「うへー」君

が手をかれぬく秋の末にしも野がひにはまつ馬ぞりかき(万)九十一「玉くしけあ
 りまくをしきあたら夜を衣手かれてひとりもねん(同)七とかりの君のりねてよ
 りさり妻られて(いせ物)「相おもひせられぬる人をとめりねわがまのいまぞき
 えはてぬめる(万)十一「志きたへの衣手可禮天わをまつとありねむ子らがおも
 う々に見ゆ(同)十二「うらぶれてかれに袖を又まりの(同)十九「山吹の花と
 りもちてつれもかくかれに妹をしぬびつるも(同)廿三「つれもかくかれに
 のと人はいへどあはぬ日まねみおもひぞわがせるかれ別に出す
 かる枯。カル、カル、カレ、何も(新勅)維一伊勢大輔「わをられてとくればつる冬草のか
 れて、人も尋ねざりなり(新後)戀五房嚴「むをさよ霜置まよふ冬草のかるをひ
 との契りかれとは(後撰)戀二もろ「おく露のかゝる物とは思へさもりれせぬもの
 いかでしこの花(源)十「おまへの五えうの雪よをれて「かたひろみたのみい松
 やかれにん忘たをちりゆく年のくれかな(夫)廿七正公朝「かれはて、後はかにせ
 んにいははやりかむ鮪のことわりぞり(同)廿七知家「都出衣手かれてあらち
 山色かはりゆく秋風ぞふく(同)廿七「小車のわたりの水のかれにひれふる魚の
 われをよさふり(拾玉)五「思ひぬるまことの道のあさぢ原うたれいと露の

こぼる(千載)兼中「分わびていとひ庭のよもぎふもりれぬと思へば哀也なり
 (万)十六「み、かしの池うらめしわきもこがきつゝりくれのみづのりれあん
 (中務集)蛙のりれたるを人のおこせて「りれにる蛙の聲を春たちてあさぢあり
 ぬと思ひるる(源)玉かつら十聲いたうりれて(同)十五ふつゝりある
 さまいたる翁の聲りれさまがに氣色ある(同)帶木廿八かれたる聲のをかきにて云
 ば(同)わかひらさき九かきたる聲のいといたうさきひがめるもあはれよ(枕)三、あ
 やうりれをみたる物の聲にてさふらはんにいかゞとあまたへびいふ(源)夕顔
 四十虫の音もさきりれて
 がる(土佐)いりよんざるといふりがりてとふ(狹)四上、わづらはしがるもを
 かしくて引をさめて見給へば(同)八をいみりかきり聞ゆれば(源)をどめ)廿一か
 ころがり給へど人の親よおのづらおれたる事こそ出くめれ(同)廿二あやま
 しがりてふし給へれど(枕)七うれがりて宮の御前にも猶それ舞させたまへと集
 りて申まどひ侍りかば(源)玉かつら六京にゐて奉りて云々と思ひいそぎつるを
 こゝかから命たえむかりぬる事とろめたがる(同)わう紫廿六うへのおほつかあ
 かりをさきこえ給ふ御りきもいとほしう見奉りかから(狹)四上、四母上を

やまゝに給ふを云々いとゞくるゝがりまさり給ひて(土佐)いざらまゝに
とくやゝがる(源)ゆふは(廿)きこそ心づよがり給へど(狹)二十下過に一方かゝらま
ゝらめたくかんかどことよがるを更けうらひき給はねば(いせ物)六十あひれがり
てきてねにり(土佐)此歌をこれうきあはれがまども(源)夕顔(七)又かくさゝめき
かけき給ふとはのくあやゝがる(狹)四下かゝる事をほのく聞え出てうちさゝ
めきあやゝがる人々おほくかりたるに(枕)二物さゝに宵よりさむがりわかゝき
をりつる下司をのこかど(源)あせ(廿)めりゝがらせ給へど(同)葵(三)四十人々めづ
らゝがり見奉る(同)せきや(六)たゞこのかうちの守のみぞ昔よりまき心ありてすこ
ゝかさけがりける(同)初音(八)こととく草がちにもさえがらせめやまかくさま
さひたり(源)玉うつら(七)聞ついつゝをいたるるかり人とも心づけせうをこがるい
とおほりり(同)蓬生(八)御琴のねもうけ給はらまほゝがる人かん侍る(同)よこふえ
二ねんころがり聞え給ふ

かるくゝゝ

かるらり

かるむしめ

給ふ

右

カロくシ

カラカ

カロム

の下に附す

かるりや(古)誹諧よみ

「まめかれど何をいよなくかるりやのみぞれてあれどあゝ

はくもな(六帖)上

「まめかれどよきかもたゞせりるかやのいざみぞれかんちど

ろもどろに(同)「秋風にみぞれをめにゝかるりやを我ぞつらねてゆふまぐれみゝ

(同)「かるりやのはに出てものをいはねどもおびく草を、あはれとぞみゝ(新六)

内大 臣 「嵐ふく岡べにちるかるりやのうはゝの露のまづみぞれり(同)知「露を

がら野べのかるりや秋風のふきのまにゝさもぞみぞるゝ(古今集打聴の頭書おか

われどそれにはわらず草をわかやといふ事有こゝも唯草を刈ことあるべし今

案するお六帖草部よかるかやと出したれば早く草の名よびつけしなるべし

かるい(浮石)和名(八)文州記云体虚而輕(和名加)

補 たるめる(體源抄)たるめるといふ字の事大神景範家記に載之上下と書りうち

まりせて人不知事也可秘藏之甲乙ともなり

たるも(カ) (夫)廿七法性寺入道「秋の野のたるもがまゝ月もりてならびふを猪

のりやもりくれ(同)同頼「君こふとるのたるもよりねざめしてあみはるぬゝよ

やつれてぞふる(夫)廿七正治二年忠良卿「さえわびてふを猪のゆめやさめぬらんたるもの

床まあられふる也(土御門院御集)「谷深とふをのたるものきとえてなれゝ都ぞ

うとくなりゆく(壬生二品)上「さても猶ふをの床や安りらんたるものぐうへ萩

のゆふ風(夫)廿七定家「落つもる木の葉もいくへうづむらんたるものたるもさもそ

らいで(後拾) 戀四いつ 「あるもりき臥猪の床のいをやま(同)をささこそねざらめゝら

きも哉(夫) 廿三衣笠 「これりも見て忍ぶらんあるもりくふを猪の島の秋の夜の

月童蒙抄云 かるもとい枯たる草あり其草をかき集め 補(續古) 旅 「あるもりくる

なの、原のりりまくららさてもねられぬ月を見るりな(賴政集) 「雪ふれば何より

身を隠さべきあるもが下のゐどころもな(續後拾) 秋上前大 「秋の猶いうよかる

ものみどるらん露よふせるの床の山風(新續古) 秋上 「かるもかくるを野の末の秋

風よこやの池水さなまぞつ(千) 戀三 わが戀のあまのかるもにみどれつゝか

わく時さき浪のいとくさ(月詣) 十一 「月さよとあまのるるもをのさおはばまささ

よあさるともちどりのな

かるものく 是の前のどの異あて只刈 (いせ物) 六十 「あまののるるもよすむ虫のわ

きのらとねとこそをめ世をばうらとト 是と同ヒ (夫) 廿八家 「あるもりきたく搦

がまよあらねども戀のふりや身よりとつらん(續古) 旅後法性 「あまのすむ礫の

とまやのとびねいのるるもぞ草の枕なりなる

補(のをり) (玉葉) 春下入道前 「咲みてる花ののをりの夕つく日のをとていづむ春

のとやま(同) 同永福門 「をちのこの花ののをりもや見えてあくる霞の色ぞの

どらき(風雅) 春中朔 「さささのぬ梢の花もおかへてひとつかをりにをむ夕く

れ(同) 春中 「薰りよほひのどらき色を花よもて春にをかへる櫻かりり(千)

雑上和 「かをる香によそふるよりいはとぎを聞さやおなト聲やいとると(堀次)

泉式部 「ことひかさのをりにそへていとくくれかるふりくよほふ梅りな(拾愚) 下「鐘

の音も花のかをりになりてぬをはつせ山の春のあけほの(拾玉) 四 「なつりいや

花さちをかのかをる香とまとよかがむるよその月のけ(源 花散里) 四ちのきたちを

なのりをりかつのいく(書紀) 一書 伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉云々

かわく (字鏡) 六燥保須又可和久(竟宴歌) 「ひつきのゆくりのやどりのをさる

ともあらさの國のちちの可和可之(御堂關白集) 「そとふべきさびのあらねと草

枕涙の露のりわくよぞあき(古) 哀 「こを人の花の衣よなりぬかり苔のさもとよ

かわきさよせよ(からろふ日記) 「わが袖のひくとぬらいつあやめ草人のさもとよ

かりてりわのせ(源 わかあ) 下七女君の云々 御ぐいすまいて云々 とよもかわりね

と(拾玉) 四 「夕立の雲より出る月かたのわりぬ庭よ氷をぞまく(和泉式部集) 上

「我袖の水のあさる石なれや人よいられでりわくまもない(千) 戀二 「我袖の汐

ひよ見えぬ沖の石の人こそいらねわくまもない(詞花) 冬 「山ふりと落てつも

れる紅葉のりわねる上よりぐれふるなり(拾玉) 四 「思ひきやかも川浪立まぢに
りわきし袖よりん物との(同) 一 「ぬれ衣をきるときくこそうれしなれりわね
袖をいとふつらさよ(同) 六 「芹つゝ昔の水は袖ぬれてわくひまなき身をいり
ません(補)(新古) 夏 頼政 「庭の面のまざるありぬま夕立の空さりななくさめる月をか
かりい 加階 (拾遺) 雜 「加うい侍るべりり年え侍らで云々 元輔(源紅葉賀) 五
頭中將正下のかい給ふ(榮さまく) 三 宮づりさ殿の家司かどか、いしよろこ
びのゝる(源をとめ) 七 われより下臈と思ひおとしりいどまを各か、い
のぞりつゝおよまけあへるよ(後拾) 春 かりい申れるよまのらで云々 元輔

か、ち (神代紀) 上冊 眼如赤酸醬

か、り (鞠の庭) (源わかな) 上九 鞠もさせ給へりや云々 やり水かどのゆきあひを
れてよあるか、りの程をたづねてたちいづ(盛衰) 卅七 「まりこ川れれを浪の
あがりなる 源二 か、りあくも人やとるらん(夫) 廿一よと 「まりの岡何ぞか、り

と思ふらんかさうつ浪の音をりりて(新古) 雜上、雅經の 最勝寺の櫻の鞠のか、り
よてひさくかりよしと

か、り (斯有ナリとありか、り) 斯有ナリとありか、り 〓 (源帯木) 廿いりぞたか、りれんと云々 (後拾) 秋
の部どかくの所よ出す

惟宗 爲經 「いよへの月か、りせばかつらさきの神のよるとも契らざらま(和泉式部續
集) 「か、りきと人よりたるをききたへの枕のおもふこととどにぞうき

か、り (懸の動ける詞カ、ルの所よ附す)

か、り (箒) 卅三大藏 「日もくれぬをどく螢のりよてあかしの浦よふかとど
めせん(万) 十九十 鳥つ鳥うりひとあへ可我理左之をつさひゆを(和名) 十二、

篝火、漢書陳勝傳云夜篝火師說云比乎加々利途須今案漢者以織作篝盛照水者名之此
類乎(夫) 八賀茂 「あねぬるり鶴舟のか、りたき捨てはふりもいらむとりのよのそ
ら(同) 同 (新六) 衣笠内 「か、りささうりひの小舟りひくどりあはてせのぞるよと

の川波 (か、り) 火(源をとめ) 四十 中島のわたりよこ、か、り篝火ともとめて
か、り (髪のかいり) 〓 空蟬に髪のがりばといへる
か、り (末よいたす) 〓 類か案するにの助語か

か、り (髪か、り) 同

か、り (後撰) 戀二仲文 「ともりくもいふことこののまえぬりかいづくの露
集右京

のか、り所(源をとめ) 六 世おとろふる末よの人よかるめあをづらるよか、
り所をき事よかん(同) 廿をぞりかき御心のか、り所ありてももてかい
給とト

補かゞりふね 籜舟 (万代) 夏二條贈「かゞり舟さしてぞくたる夏川の底のもくづも
りくれおきまで(壬二)上」左大臣母「さておき波間のあまれりり舟おもひにあまるうき
ねくらべん

りへる 斯有かり此ヤウナ此ヤウニかへり (源若紫) 九例の心かゝりへるわざと
て(同 桐つば) 六かへる人も世に出おそる物かりたり 讀切る格此 (とりりへそや)

三、廿(源桐つば) 三 もろこゝよもかへる事のおこりよこそ世もとどれなれと云々
(枕) 五 あさましう犬かどもかへる心ある物かりたりと笑させ給ふ(新後) 雜下よみ
「何と又心は物と思ふらんりへらととてぞ世とばいとひ(後撰) 哀傷 女上女 「もろと

もよおきる秋の露をりりかへらんものと思ひかききや(源蓬生) 八かへるやどよ
のの家ある下大貳は成ぬ(風雅) 雜下 「今さらよろ」といふこそおろかかれかへる
べきよの末とらせや

かへる(夫) 廿三永久四年「海原やそりよ此沖よりりさる唐土舟は時つくるあり
百首兼昌

かへる(千) 春下大炊 「とふれどかそらぬ松とこのとてやかへりそめん池の
門右大臣

ふちかゝ(拾) 雜戀よみ 「いづくとも所さどめぬらくものかへらぬ山はあらとと
人しらす

ぞ思ふ(いせ物) 六十 むさらからさちよかへりて家よ來て打ふせり(續古) 春下 「と
三段

きとある松のかどてよあやかくもかへれるぶちの咲てちる哉

かへる 俗は肩よかへるをいへる (源みのり) 十六紫の上の 空とあめむ心ちして
近し人の世話よなるをいふ 送葬の所

人よかへりてぞおそしまへるぞ
かへる 俗に子あかへる娘よへるカ、リ (落くぞ) 四子二三人聳とりされど今よわ
子ガ、リ娘ナトいふと同ヒ

れにかへりてこそありつめれ(うつは 俊蔭) 中兒熊ニ使ふ可き人もかくてあれと
向ヒテ詞 宿よさびひとりそとて丸が参らるる物よかへり給へる母もち奉りさり(同 藏開)

中、卅こと人の上達部とことちの娘かれと親も物し給せとておとよまかたりた
まひ侍りしうバ云々(同 さかの院) 七十そつりよ侍るめのわらへの男よ侍りし山伏

の苔の衣とぬぎ松の葉とつゝとて深き山よりとふらひ侍るもわりちてやいかに侍
るにかへりて一人の老さも侍らせ云々 **補**(榮衣の珠) くびよかへらんわれひびぎ

よこそあめ
かへる 是も其オカゲニテ (りけるふ日記) 一「手ふれねど花のさくりよかりよたり
の心上の詞お近し

とどめおきける露よかへりて(同) 弓の所 まれ物と定め一方の此矢ともよりりて
かんぢにかりぬるとつたおこせる人もありぢよかりよなれば云々 右人ニカ、リ

テ人ヲ頼ミテ露ヲタノミニニテ
と譯すれば聞えやすし

らゝる 脇息 (源みゆき) 九御をふそくにかりてよわなかれど

かゝる (源夕顔) 七さしてきこえかゝれるこゝちのよくりらむをぐーがさきぞ
(榮つやみの花) 二甘あれといさき奉らむやと思へども泣やせさせ給へんとわづらひ

くてとの給をそればあどてりよもかりせ給もトとておそしませと申させ給へばこ
ゝかゝりにかゝらせ給へばあかうれしやとていさき奉らせ給ひて

かゝる 其物其事にたづさるる (古) 諱「思へども猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山のあ
らトと思へば (源わかむらさね) 六 甘 さもかゝらぬくまき御心りか (枕) 二 まし

て験者かどの方いと苦しきありとさけ熊野かゝらぬ山をくありく程よ (源浮舟)
「いづくにり身とばよせんと白雲のかゝらぬ山をくくぞめく (千) 春上 花故

よりゝらぬ山ぞかりれる心春の霞をらねど (枕) 十一 三 清のおのづら物知り
世の中もどきかどせる人のあいかくろこき御事よかりてかこたれなれどあ

をかたトれき事かどの又いづら (源うき舟) 四 かく物おもそかるべき方あ
もかゝりそめなんよと覺を折くおろくかん (うつほ國讓) 下 七 甘 いでや子ども甘人

にかゝりてもて侍れどそこをばふところといふをりよおろしとて奉りしうば
かゝる 右は同じ心ながらひた (源東や) 九 手よさくさるると思ひあつりひう

ろと奉るにかゝりてあん (うしろふ日記) 一日頃月頃煩ひてりくかりぬる人ぞ今

いふりひきき物よかして是よぞ皆人のりりて (いせ物) 四 狩ねんころにもせで

酒をのみのみつゝ大和歌にかゝれりなり (風雅) 戀一西宮 「露斗さのむ心いおれ

どもたれあかゝれる我からかくよ (万) 五 四 あまつ神あふきこひのこくにつ神ふ

てぬりつきかゝらむもかゝりも神のまあくと (源須戸) 「海よまを神のめぐみよ

かゝらむの汐のやあひよさむらへあま

かゝる 罹災の (後拾) 三 雜 靜範法師やまこの宮の事にかゝりて伊豆國に流されて

云々 (源夕顔) 七 けり給へるはのきく女房かどあやしく何事やらんがらひのよ

し給ひて内にも参り給を又くさゝめきかき給ふとすのトあやうがる
かゝる 波露泪の (新古) 戀二 「ちらをよまのゝもぐさのかりにても露かゝるべき
袖のうへりま (大和物) 「あうれくもこのとれる哉世中を袖にかまごのかゝる身ぞ
もて (新拾) 戀三 重成 「さゝかにのいとかきさそ夕より袖に掛る涙也なり (續後拾)
戀三 「今ぞする馴ての後もから衣をぞに涙のかゝりなりと (新古) 戀三よみ 「か
元真 初にふしこの野べの草まくら露かゝりきと人に語るを (艶書歌合) (金葉) 戀一 紀伊
「音にきくたりの濱のあど波のうらりや袖のぬれもこそをれ (續後拾) 戀一 俊成女 志

らざりきむをぬ水にり夕まで袖にまづくのかゝる物との(續拾)旅道信 「時雨を
るこよひ斗ぞりみお月をそでにもかゝるおみどかりなる(續拾)釋教選子 「草の庵に
と一へ一程の心に露かゝらむと思ひりききや(新葉)戀五新宣 「りよひこ一人の
のきさのわをれ草つゆりれとの契やいせー
陽門院

りゝる引トメラ源夕顔四十又ことのそにりゝる命よ

補りゝる其時コナラン新古春下柴の戸をささや日影のかをりかく春くきり
宮内卿

る山のとれ雲(同)秋上攝政 太政大臣 「くれりゝるむかき空の秋をまておぞえむとまる

袖の露りな(風雅)秋下後西園寺入 道前太政大臣 「入りゝるせちのゆふ日わり夕きえてせそより

くるゝうせぎりの山(新續古)旅尊圓 「くきりゝる山のし道分ぬら雲こそりへれ

あふ人もな(續古)夏隆親 「くれりゝる山田のたでのぬれ衣をさでやあそもさかへ

とるべき(同)秋上太 隆親 「有明れ空にぞ似たる山のとれ入掛りぬる月のおも影(續拾)

夏如願 「くれりゝる左のやれ軒の雨れうちぬれてこととふるとゝぎせりか(同)

法師 泰綱 「こえりゝる山路の末の知ねもながきをたのむ秋のよれ月(同)旅光明峯寺
入道前攝政

「明ぬとて山路にりゝる月影にりそりていづる秋の旅人(新後撰)景綱 「こえりゝる

山路の月のいらぬまに里までゆりむ夜のふれぬとも(玉葉)秋下 爲教 「くれりゝる伏

見の門田うちかびきやかみをわさるうちの川舟(同)冬 爲氏 「くれりゝるゆふべの空

よ雲さえて山のとほりりふれるしら雪(同)雜二 忠久 「しる風のあぎさの松におとづれ

て月ぞかみ間に入りりぬる(風雅)夏公泰 「くれかゝるをともの小田のむらさめに

せゞしさをへてとるさかへる(壬二)中 「くれりゝる嶺のしを屋の夕しゆにされ

しらくもの衣うつらん

かゞよふカイヤ夫廿七俊頼 「三日月のり夕にかゞよふの夕るふのそをりにて世

をせでせ哉(同)十九よみ 人しらす 「ともいびのかけにりゞよふ埋火の妹がそみ顔おもか

にみゆ(同)同(新六)爲家 「もかかくもたくひもかなし灯のかげにりゞよふよその

松虫(万)六 「みわさせばちりきものから石かくれ加我欲布珠を取るやま(同)

十一 「ともいびのかげにかゞよふうつせみのいもがそまひおもり夕にみゆ

廿六 「ともいびのかげにかゞよふうつせみのいもがそまひおもり夕にみゆ

りゝるカヤ源ととめ廿七いとりゝるれとしもおもそれざりらん(後撰)雜三 「たら

ちねいのゝれとてしもぬを玉のわが黒髪をなせやありらん(土佐)りゝれど此歌

をひとりごとにしてやみぬ

かゝあべて(古事記)中四 迦賀那倍氏夜にのこゝの夜日に十日を 宣長の説ふ日
日並事也日數

をいふ二日三日八日十日あどのかも同じこれを屈並てとし
又考へてあといふ説の誤りなりといへりげよさること也

り、かく(万)十「つくさねにり、なく鷲のねのみをりなきわたりかんあふといな
しにガク、といふ
聲おなくといふ

り、れさも(和泉式部物語)「り、れさもおおつなかくもおもほえせこれも昔のえ
にこそあるらめ

り、づらふ(源幻)九 命といふ物今をさしか、づらふべくとも對面のえあらどり
しとして(同 帚木)七 受領といひて人の國の事に、づらひいとなみて(同)八廿かの親

の心をさ、かりてさそぐにり、づらひ侍りしとに(同)九つ蟬)初あながちにり
かづらひたどりよらんも人わろるべく(同 紅葉賀)九こ、りこあまさり、づら
ひ給ふをぞ(同 松風)廿なにがしの朝臣の小鷹狩にり、づらひて立おくれ侍りぬる

(同 神)廿やをら御帳の内にか、づらひよりて御ぞのつまを引ならし給ふ(同 若紫)
十思ふ心ありてゆきか、づらふ方も侍りながら(同 夕きり)廿とちくいひり、づら

ひ出んもわづらひしう(補)枕)四、廿雪の山にのりり、づらひありきていぬるのち
に云々かれがそしたなくて雪の山までか、り傳ひんこそいと悲しけれとあるを

廣足按におなし事をり、づらひり、りつたひといへるり、りつたひの略轉して
り、づらひといへるものなるべし(源 浮舟)六十り、り、づらひおもささるべ

きさまに聞えさせ給ひてよ(同 藤のうら葉)二十人わろうか、づらひ心いられせで
か、らん)斯アラ(万)二、三 かねらんとかねてちりせば(後撰)哀立上「もろともにお

きる秋の露をかりか、らん物と思ひかきや(源 若紫)十かをかりにかれはいと
か、らぬ人もある物を(源 帚木)七いとか、らでおいらかからましかばとおもひつ

、(後拾)雜三「見るたびは鏡のかげのつらさかか、らざりせばか、らましやの
か、む(源 帚木)九此めびをかめてまかぬ(同 空蟬)五いでくとおよびをか

めて(補)著聞)十、廿人々よりて死人おいかめてかき出しはれり
か、のみ(祝詞式)六月晦大 速開都咩止云 神持可々吞如此久 可吞氏。真淵の
々と水をのむ音ありりふく
といふも同じといへり

か、ぐ(万)七、廿 「をとめらがおる機の上をまくしめてか、たたくま波まより
みゆ(源 桐つや)八 ともいびをか、たつくしておきおそしまを右近のつかさのと

のる申の聲聞ゆる、丑にかりぬるるるべし(夫)十とさかぬ入 「白露の玉のをごと
の手向して庭にか、ぐる秋のともいび(續千)釋教 「消ぬべき法のともしびみるた

びよか、ぐる人のなきぞかなしき(源 帚木)廿とうろかけをへ火あかくか、たなど
して(つれど)二 九すみをか、けて見るものあり(夫)十三 花山院 「秋ふりみくもりか

十

十

き夜の大ぞらに誰か、夕たる鏡をるらん

かゝぐる (落くろ) 三 かくもせよとをち給ひいかばこそ典薬も何もかゝぐりよ

りたりれめ (枕) 九 碁を打ささかりと知らでふくつれさの又こと所よかゝぐりあ

りくよ (宇拾) 十 應天門の云々柱よりかゝぐりおる、ものあり云々次に子なる人お

る云々何わさしておる、にかあらんと云々 (今物語) 七 只一人出て行れるお漸其

國までかゝぐりつきおりり (盛衰) 四十六 如何してそれまでもかゝぐりつかれん

かゝやか (恥る (源 帚木) 卅 尋ねまどとさんとわかれ忍びせかゝやかからせ

打いらへつ (同 末つむ) 十 物思ひ知るまどきとひとり身をえ心まかせぬとど

こそさやうにかゝやかかきもことわりなれ (同 橋姫) 廿 わかき人々のなごらかに物

聞ゆべきもなくさえかへりかゝやかかきなるもかたそらいたれれば

補 (枕) 四、十 又よるひるくる人を何かいなくともかゝやかかへさん (源 常夏) 十、九

たへのかゝやかかきよやといとはづかかきにきこえ給ふ

かゝやき (源 竹川) 卅 藏人の少將の月の光にかゝやきたりけいさも桂のかたよ

もづるよのあらせやありん (源 あけまき) 八十 見ぐるゝなる人々もかゝやきか

くれぬるやとよ

かゝやく (耀 (雄略紀) 十 其雷虺々目精赫々 (源 桐つや) 廿 御覺えもととりとよなれば

輝やくひの宮と聞ゆ (榮 ことてぬ夢) 十 淑景舎まぞをませ給ふ何事もとよかゝやく

やうおれはいそん方なくめでと (源 若紫) 四十 庭のまなま玉をかさねらんや

うよ見えてかゝやく心ちるるよ (夫) 九 權僧正公朝か「蘆原やねたるかゝやく神迄

もとびちるをかりそらへるなり (今物) 卅 此島の松の葉ことよ金色の光のええて

かゝやく事などを侍るといれれる云々 (榮 駒くらべ) 二 空それ月くもりかくかゝ

やれるよ (源 浮舟) 卅 山の鏡をかりとるやうまきらくと夕日よかゝやきとるよ 補

(方代) 戀三 白露のかゝやく月の影これかくやくまさおさまれるかか

補 かゝやきかへさん (枕) 四、十六 夜もひるもくる人をばかまかいかどもかゝや

きかへさん

りままる (大和物) 四 蘆刈 釜のしりへまりままりをりれり (宇治拾) 廿 侍どもは

したかくいひれれば泣つ、歸りてりままりるより (源 ともき) 九 腰さへぬまぞりま

まりありくため、昔も今も侍るめれど (夫) 一 仲正 家集 「かさくをやちりへの園よわり

かつまかゝまりありく翁をがよ (同) 廿七 仲正 老人心と「今のわれ世を海ますむ老えびの

藻屑がまよるままりをせる (源 若紫) 二 老りままりてむろのとよままりでせと

増補源氏物語 卷之卅五 十一

申されば補(落くや) 一ついりままりてふをさしとらせて(うつは 國讓) 廿七 あ

せも忘ど、濡てりままりふ給へれ(宇治拾) 一目も合せりままりある程

か、け か、くの所よ

か、夕のはこ (源末摘) 卅 わりなくふるめきとる鏡臺のりらく、夕の箱か

どどり出さり(源わか) 卅 四 ゆするつきり、夕の箱かどやうの物(新勅) 物名り、

夕のはこ髪わけの具也

り、ふ 字鏡殘帛也 (八雲) 四、十つまの名をいふ也(万) 五、廿 布りさきぬのこる

のことわ、はさされるり、ふのこ肩ようちりけ。顯昭云きり、すのつりさせ

り、ひろはんどかくといへりり、どの絹布のやれて何もそべくもあきをいふ

補 り、むふる (万) 五 あさふまひさきり、むふり 云々 (同) 廿、十一、り、こきやとことり

むふりあせゆりやうえがいむさねをいむか、いして

り、え 抱 本語カ、ユ (蜻蛉日記) やがてのりてか、えて物、ぬ(榮花山) 七、女御

あり給殿まづかう、の事候と申させ給ふ、云々か、えてさふ、まろびまど

はせ給ふ(同 楚王夢) かく、か、えまつらせ給へり

か、え 香よ(枕) 三 人の家の前をわたる、云々さきもの、りのいそとくか、えと

るいとをか、(同) 三、十 汗のかきこ、か、えとるきぬのうき(同) 九、廿 蓬此車

お、ひ、ぐれたるがわのまひたちとるよちかう抱えとる香もいとをり、(同) 三、廿

其折のりのこりてか、えとるもいそとをか、(かたろふ日記) 四、きのふの雲かへ

そ風打ふきされ、あやめのりそやうか、えていとをか、

り、めく (今昔) 卅 山近き濱ある、猿海邊、のむめきるたり(万) 十四、つくをね

のむかく驚のねのそをりさきわさりかんあふとのか、い、はれ、の聲をかく、と

いへれ、か、い、めく 補 (今昔) 猿何やらんのむめきいへ

か、み 鏡ウツリシカゲカクル水ノ鏡クモ、ナキ鏡 (神代紀) 上、白銅鏡(万) 十三、い

くひよの鏡をのけ(六帖) 五、下、り、くとどよみ、見ゆる物をらば忘る、不ともあ

らま、ものど(古) 戀五 興風 一、うらみてもあきてもいそん方をあき鏡、よめるか、夕から

せして(源 玉かつら) 四十、つれなくて人のり、ちお、そからんの御心をめりあきて

いづれをとる覺をと聞え給へば、それものむみよて、い、り、でか、と、き、を、が、は、ぢ、ら、ひ

ておはせ(同) こ夏、の、む、こ、思、ひ、合、せ、ら、れ、給、ふ(万) 廿、五、十一、さ、く人のり、み、よ、せ

んをあ、ら、さ、し、よ、さ、その名ぞ

補 り、む、こ (日本紀竟宴歌) 一、玉か、い、の、を、か、玉、の、木、の、鏡、葉、は、神、の、ひ、も、ろ、き、を、あ、へ

柏 乎加 乃 乃 爾 乃比茂呂伎 供

津留哉
つるかか

のびみかけ (和名抄) 四十 鏡臺加々美

のびみどりくる (夫) 卅二「この山の峯の榊葉くちせせの鏡をうれい枝もはらト

(源 浮舟) 三雪のふりつめれるよ云々 山の鏡を掛たるやうよきらくと夕日は輝や
ささるよ

りびこのおもて 鏡の (夫) 卅二「磨を鏡の面明らかみ四方の姿のうつらぬい

もちひかみ (源 初音) 初 ちよまでもの夕をあらべて逢みんと祝ふ鏡のもちひさらめや

(夫) 卅二元日 戀仲正 「ちよまでもの夕をあらべて逢みんと祝ふ鏡のもちひさらめや

りびみのけ (古) 物名「ぬえ玉のわぐくろ髪やはるらん鏡のかたよふれる白雪

(狹) 一、下卅七大將わが子の孕ま 年月へて鏡のりたもかはらぬさまよいていひいらぬ

物の中はおひ出たらんよ (堀太) 述懐 「何をして翁さびらん朝ごとと鏡のりたせり

つとがめつゝ (夫) 七 (散木) 俊頼 「あやめひくみぬまをこれバ唐國よふやのび

のりたをまをらん

のびみぐさ (和名抄) 一、十 芫蘭本草云蘿摩子一名芫蘭 (夫) 廿八「のたを

のそをよおひたるのびと草露さへ月よ影とがきつゝ (後拾遺) 釋教よみ 「まはか

のはづのりたなるあさぐををかびと草よもよせてはる哉

かび (万) 九 廿 三 をとめをとこのめきつとひのびふりびひ人妻よわれもまどは

ん我つまよ人もこととへ云々 此は一つくりよ登筑波嶺爲嬬歌會日作歌 云々とあり

畧解よ嬬歌の廣韻曰嬬々往來貌韓詩云嬬歌蠻人歌也とありかびひのけあひを約

めさる語よてりけあひうさふ故よいふなるべいとあるせり。夫よ捨られたる女を

いふと袖中抄童蒙抄よあるの誤り也

のよのそ かのふの所よ附す

りよちやう 駕輿丁 (狹) 廿四下 賀茂の行幸の 云々 川わたらせ給ふをどののよ丁の聲

も聞よくきよ身もなけつべき川の契りせかどりくいふらんと聞せ給ふ。御このの

のよちやう (狹) 三 下 十五

りよわい (源 桐壺) 四 おとよめきせどもとめ給ふ人のおそくわが身のよわくも

のはかなきありさまよて (同 夕顔) 廿七いとよわくてひるも空よのを見つる物を補

同 楨柱) 十 いとびそをうかよわたり

のよれる (源 白みや) 十 六もとめ子舞ひてりよれる袖どもの打返を羽風よ (同 初音)

七竹川うたひてかよれる姿懐りよき聲々の繪よもよきとめがたりらんこそくちを

いられ 契云かよれるハタゞよれるヲイフヨリキチ (万) 四 秋の田の穂田のりりは

うのよりあはゞそこもり人れわをそかさん (催馬樂) 総角まろびあひまよりより

あひまより トイ (竹川)の巻は竹川うたひてみとしのもとおふみよる トイヘルモコ

のよふ 通ふ (いせ物) 廿三 九のやその郡よいきのよふ所出来まより (源末つむ) 三父

君のもとと里よてめきりよふ (いせ物) 廿二 いよへよりあはれよてなんのよひ

れる (源夕顔) 十 うちはいどつもの道よてかんよひ侍る (同) 四十 心ざりあるさま

よかよひ給ひを (万) 四 五 「心ぐおもゆるかも春霞たな引時よこと通へば

(源蓬生) 七 かよひ参り齋院うせ給ひなどして (万) 卅一 「青よよならの家よ万

代よわれも通そんわると思ふな (源帯木) 四十 さへていいかでか御文おとも

かよはん事のいとわりあきを覺ま (古) 八 五よみ 「忘らる身を宇治橋の中さえ

て人もかよそぬ年ぞへよる (夫) 十七 順 「もがと川い舟のまいかよのぞており

のぞり猶さわくあいかも (同) 同家 「川おその舟もかよそせいる一舟のかよふをそ

てと氷る湊 (續千) 戀四 冷泉 「かつらきやくめのいと中さえてかよそぬ人の

契りをぞえる (拾玉) 二 「むかし思ふ淀のわさりのともちどりかよひなれさる聲き

こゆかり (万) 二十 十 「みよ一の玉松か枝のそさかも君がことをもちてかよそ

新後拾 戀二 能宣 「うつとも夢ともえぬぞとさかりかよそぬるせ下ひものせ

き (新六) 五 為家 「くろかこのとたれてかゝる手まくらのさきまよかよふりせたまも

な 往來するといふ舟のみあわらず万にわたりていへり男女の中よいへるも同じ

夫) 十七 為家 「舟よとるるとのおきの友千鳥おのがかよひの風もいとそせ (源夕顔)

八 かりそひよもたのむ所そくかくるおかのかよひも思ひかけねべいと心ぞをなれ

(同) みをつくし 三折くの御ふまのかよひかど覺し出るよ (同 橋姫) 卅 さふふ

りの中よかんたまさかの御せうをこのかよひも侍り 補(拾遺) 賀 雑 ある人の産して

侍りたる七夜に 元輔 「松枝のかよへる枝をとくらよてそとてらるべき鶴のひをか

給ふ (同 椎か本) 十 折ふの花紅葉よつれて哀れも情をもかよはま (同 さうき) 十六

いと忍びてかよそ給ふ事の猶おそさまあるべ (狭) 四 下十八 大将御門 年頃い

かさまよまれさまさかよそ見奉るわざかかと思ひねがひ給へる上達めとこ

さちかと云々 (源わかな) 上七 京よこととることとあらで人もかよひ奉らざりつ

かよふ 前の心と同じわき道に (源みのり) 四 女の御おきてよいたりふかく佛の

かよふ 似るをいふ哥に上の通ふ(拾遺) 雑上齋(六帖) 一 下「琴の音」峯の松風か
よふらういづれのをよりあらべそめらん(元輔) 三「遠近の峯を」浪のへたつれど
りよふの花の色よどありれる(中務) 四「梅花色の雪よもかよふかりかへる山」て
君のととらん(貫之) 卅「御稜つ」思ふ心の此川のそこのふかさよかよふべらかり
(六帖)「紅と雪との遠き色かれと梅が花よの猶かよひたり(源桐つは) 七 大液の芙
蓉未央の柳も夕よかよひたり」かたちを(同) 六 いとよう似たり」故かよひて見え
給ふもよ夕あからせらん(同明石) 十 あやうまねおもの入侍るこそねんよかの
せんどいわうの御手よのよひて侍れ(同さわらび) 三 打忘れていふとそれりと覺ゆ
る迄かよひ給へるを(うつや 樓の上) 下 云々かどの給ふさまのいとめでたう限り
十三
かさ人の御れそひよもあよひたれば(枕) 三 卯花 青色の上よ白きひとへがさねかづ
きたる青朽葉かどよ通ひていとをり(貫之) 下 (六帖)「君こふる涙心の秋よかよ
へせや袖(空)も袂もともよくる」(小大君) 八「風吹バ浪やのさわぐ川竹の流る
水よ聲のりよへる(後撰) 四 雜のりあきらのそこかうふり」たる日あそび侍りたる
よ右大臣これのれ歌よませ侍けるよ貫之「琴のねも竹もちとせの聲をる」人の思
ひもかよふ也けり(聞かよひ(源桐つや) 卅 一 こと笛のねよ聞かよひほのりある御聲

せをぐさめよて

かよひい(夫) 廿二 待賢「あひみねと心をりりりよひ石の音よ聞てもあひれ
らん

りよひどころ 通所(源葵) 十 大將の君の御かよひ所こ、かこと覺あつるよ
りよひち 通路(いせ物) 五 そのかよひちよ夜毎よ人ををきてまもらせければ(同)

四十「出てこいあどよいまどかそらとをたぐかよひちと今のあるらん(古) 夏恒
二段 「夏と秋とゆきかふ空のかよひちのかたへそびき風やふくらん(夫) 十八 「そと
わびぬわれどよ人を尋ねせや外山の末の雪のかよひち(拾玉) 四 「山ふりよあや

くかそむ梢りを我りよひちよ春やきぬらん

りた 肩(源空蟬) 四 髪いいとふさやかよてあがくのあらねどさがりさかたのそと
いとよ夕よ(式) 八 年よわ肩よふとどをきとりかけて(万) 五 廿かふのみかたよ
うちかけ

かた 瀉(和名抄) 一 十 瀉文選海賦云海溟廣瀉(加) 万 二 十 いとみの海角のうらわを
浦をいと人こそとらめ(カマナト) 無等人こそとらめ 云々 (万) 六 十 (續古) 雑中「和歌のうら

よ汐とちくれバかたをかよあべをさしてさづあきわたる

をとりつゝろひかき酒打をろひて

らたそ(いせ物)六十五段

男女方めるされたりければ女のある所にきてむかひせり

れば女いとかたはかり身もほろびかんりくかせそといひれば云々りくかたそ

一つありわたる身もいたづらよりぬべければ(うつは)藏開六下さりさまの事

を聞えとりとも人聞せ給んやと思ひ給ふれ共いとこそかたはかれ(同)菊の宴

されどやんごとさき人おろくさふらひ給ふとして此人たちのはなかくてまどらひ給

はんかたそよこそあるれ(同)八下廿あさまうそかき内よも萬づの事かたそなる

をかん(同)初秋七上卅一つはものゝそらよやどるいつらけれどりたそにえぬおと

矢かりけり(同)同「かそとあるかのおと矢にも聞ゆれば思ひいらるゝ頃よもある

りか(同)同「大鳥のはねやうさはにかりぬらん今のおと矢よ霜のふるらん(かけろ

ふ日記)四文の事を詞かそとあるべき所のやりとてさし出され云々(源帚木)三りそと

あるべくもこそとゆるし給そね(同)夕顔四十一右りそとよ見ぐるしからぬわか

人かり(同)をとめ三かの人の御さめよもいとこのとある事あり(同)若菜一上卅り

の御ためこそ心ぐるしからめそれもかそとならせもてあしてん(同)夕ぎり十九法

いであかりその某よりくさるべきことよもあらせ(り)夕ろふ日記いとりそとある

そどにかりぬおといそ云々補(源)手習六十八りそとならんことのとりのくし

て(同)浮舟七なやいとこのたそあらんとを申させ給へ(同)をとめ二卅人の御そどの

そこしものくしくなりかんよりそとからせ見かして(同)楨柱十一人ぎゝかそと

にかのさまひかそ(同)東屋廿三わがむせめもかやうにてさしからべとらんにか

そとからとり(同)六うちそらひ給へるおひ風いとかそとあるまであづまのさと

人もおどろきぬべ(枕)見ぐるし色くろき人のひとへのをさしきとるいと見ぐる

しりりのしれひとへも過されどそをいいとかそにも見え伊勢物語古意四九丁

り(同)は癡人(源)末つむ六卅まろがかくかそはにかりかんいかからんと給へ(同)

玉かつら七いそとさかたはのあれば人にも見せで尼よかしてわが世の限りのも

とらんといひちらしされば故少貳のうまをいりたはかんああるあたら物をと聞く

もゆゝく云々うつは國讓四下此兒にいかあるいぶかきさに見に物しり

しかど更に見せ給はせ何にかにかそはやつきたる答あままがくしと父おと

ま今そこしちひさくつけてちりきにこそ(平家)七廿りそとらと附かそと人(う

つ不菊の)下六十二さどり物の給ふべき人もかきもしかそとひとの住給ふ所かとして

かそともの(狭)二下五片目あしき僧の云々をさかくてかそとものよかり侍りよ

ければ法師になしてひえの山に行ひてあらせんかど申し、不どに

補 かたさかり (著聞) 七 かたさかりも其あとの見ゆる時もとの文字の上をとめて

かさはりま 袴 (夫) 冊三 行基并 「まふくさか修行し出しかさはりまわれこそぬれり

そのかさはりま

りさはら 傍 (神紀) 上冊 兩脇有山 (源夕顔) 初 此家のりさはらに (同) 冊 板屋のりさ

いらに堂さて、 (同) すま 冊六 御ぞのまことに身をかたさかたのらにおき給へり

かたのらいたい 傍痛也キ (源桐つほ) 十 此頃の御けいさぞ見奉るうへ人女房かど

ひりさのらいさーとき、なり (同) 帚木 四 その打とてりさのらいさーと覺されん

こそゆりいれ (同) 空蟬 初 女もかまきからせりさはらいたーと思ふよ (同) 帚木

五 己がト、心をやりて人ぞおとしめかどかたのらいたき事多りり (同) 葵 二 大

將の君に萬を聞えつれ給ふもかたのらいたき物くらうれーと覺せ (うつほ) 嵯峨の院

四十 藤壺のえさやおぞらんと思ふのこそいさうかたのらいたけれ (同) 藏開

上八 此よからぬ事の筋に梨壺をもやせりらざらんかー是ぞ思ふこそうたのら

たなれ **補** (源常夏) 廿 りたはらいたたおぞいたれど (同) 若菜 上 廿 りたはらいたき

ゆづりかれど (同) 野分 九 いなこれのかたのらいたーとの給へど北のおとゞのおぞ

えをおもふよそこーかのめあるこ、ちりてりき給ふ

かたはら不ね (和名抄) 三 脇肋 和名加太 身傍之間也 波良保根

りたはらおおきて (りたろふ日記) 二 南おもてよ此頃くる人あり足音をればさに

ぞある 主人 あいれせりく來たるのとわきたぎる心をさりたはらにおきていへば

かたはらあき (源若菜) 下冊 右衛門督の和琴兵部卿の宮の御びはかどぞあそ此こ

ろめづらりあるためーよ引て侍れたかたのらあきを **附** かさはらあきやう

(源竹川) 十八 玉ういさやはとめよりやんてとあき人のかたのらあきやうにての

と物し給ふめればこそ 二 共 お 双 ぶ もの なき を い ふ 傍 若 無 人 の こ い る に ち か し

りたはららふ 傍 (源末つむ) 冊四 こそささし出てりたのららふ給へるかーらつき

(同) あ げ ま き 十 とにもおそとあぶら參らせれど カ ナ な や ま う て む ら い あ る を あ

らひよなきいさめてかさはららふ給へり

補 りたはらさま (宇治拾) 十一 かのたはらさまあよりされば

かさはらさけ 源 を と め 冊二 たゞ此姫君をぞ云々御りたはらさきせうつくしき

物におぞたりつるを (同) 冊三 かたのらさけ奉らせあけくれのもてあそび物し思ひ

聞えつるを

かたはらさびし(源蓬生)十七よるもちりがまゝき御丁の内もかたはらさびしく物があしくおぼさる

りたはま(和名)廿十酢漿草和名加太波美

かたをらめ傍目。そバめ(源葵)四十四ちりねの御りたをらめ頭つきをたぐかの

心つくし聞ゆる人の御さまたがふ所かくもかりぬくりかと見給ふ(同さかき)廿三

との方を見出し給へるりたをらめいひしをまめかとう見ゆ(同をどめ)十八ち

らひてすこしをさみ給へるかたはらめつらつさうつくしけにて(同とつね)十七ち

かしやがる御かたのらめかどをいとほしとおぼせば(同やとり木)九十七尼君をはぢ

らひてをさみたるりたのらめこれよりいよく見ゆ

かたの(兼盛)十八君がへん万代の數かぞふればたぐかたの千とせありたり

つくりは祭の使(十)りたをら水のぞきかたの島にりていりめしきつり殿

つくられて(同たつの村鳥)十八さをりりめでたかりし人のその人にもあらで申給へ

る事どもりたはしより聞え給ふ(源帚木)四七りたはしづ見るに(同葵)四十七いと

ぞりくして年頃あはれと思ひ聞えつるりたのにもあらざりたり(同朝顔)五七な

へて世にわづらひし事さへ侍りし後さまに思ひ給へあつめしうをいりぞり

たをしをどにとあながちに聞え給ふ(同繪合)十四ちりへりぬりしがれどうへのも

宮のもりたのしをどにえ見せ(大和)百四十八かたのしより上下をまつたれ

を(宇治拾)九廿あやまちどもせりさはしよりとふに

かたの(片帆)廿六忠岑(續古)戀五あふ事の今のかたをよかる舟の風まつるとのよる

方もあし(夫)廿六信實「室の浦のせとのせや舟波さて、かたをよくる風のせしき

ら風(新後拾)戀四このまこと浦風し行舟のかたをよかりにかゝるちぎり

の(同)同天皇「こと浦に心せかたをよより跡までしらぬ中の早舟(万代)雜三

「大しや淡路のせとの吹わたにのせりくごりのかたはらくらん(同)雜一「むろ

の浦のせとの早舟浪さ、せりさるにのくる風のせしき(同)雜一「あそぢが

た楫音を也ちこの江の朝日の霧にかさなりくれて

り(源夕顔)五七ちをはかるをどよめのとやうの思ふべき

人のあさましうまほに見を物と(同)五十三見る人さへかさはから物ほめがちを

るとつくりとめきてとりかを人物し給ひれをかん(同紅葉賀)六一人の御ありさ

俗に云ふフロッ也マ(源夕顔)五七ちをはかるをどよめのとやうの思ふべき

増補新編源氏物語 卷之十一 十九

まのかさほよその事のあかぬと覺ゆる疵もあし(同 葵)廿かのめにかさほあるをど
に人の親のいかゞ思ふめるましてことわりなり(枕)二なまかの人のかさほあらん
事よりのたよときこえて中(一)いとよとぞおぼゆる(大鏡)七御心をへ人がらと
もにさへいさゝかかさほはにてもさうれさせ給ふべきもおそくまさせ(補 源 蜻蛉)
五十山のふところよりいできさる人々此かさほあるのなかりぬるこそ(同 梅枝)廿
もいのおやなくて世中たはにありとも(同 夕霧)四十ものおもひいらぬわらうど
のほどよまたおせせむたはなるところかう

(一)かさへ(カッタツ方ノ心ナリ)古(夏恒)六帖(一)「夏と秋と行かふ空のかよひぢり(六)
半分ハ半カタ大半」(古)躬恒(六帖)上(二)内裏の菊合せ「もとよりの色にのあれ

ど菊のそあかたへ(一)うつせ所がらかも(人丸)七(下)廿「よと共波(よろ)き磯のいも見れ
ばかさへぞりわく時のありぬる(土佐)そとりよ松もありき五年六年のうちよ千と
せや過にぬんかさへいなくかりよ(うつはた)こそ二 年頃女といふもの目よ
ちかく見給いせとゞこそせめよもかさへ子よもかさへとこのとおぼしてよかくあ
ぞやいなひ給ふるとよ(同 樓の上)十五一宮大宮の御方トの人々かさへいつりど
のようつりぬ(源 葵)葵の上のあまりわりくもてあし給へばりさへいかくて物し給

ふぞ(同 玉かつら)廿昔人もかたへいりらで侍りければ其世の物語りいはべりて

(同 鈴虫)七心ならぬ人をこいもまどりぬればかたへの人くるうあひ(一)き聞
え出くるわざありと云々(同 橋姫)廿六 さんかきならし給へるいとあされに心を

しりたへの峯の松風のもてそやまなるべし(同 かげろふ)十(浮舟の葬云々)とそり
はれさかたへおはせる人のこと更よかくなん京の人へ給ふかるかどさまトに

なんやまからせいひれる(源 常夏)九 ちくの給ひさわくをましとなく思ひるよ
もかたへよのやうきよといとそづかすよて聞え給ふ(細流片親兄弟兩説 宣長の兄弟と云り)

(補 カッタツ方)新古(夏 慈圓)「夏衣のたへをましくなりぬなり夜や更ぬらん行合のそら
(宇治拾)三それよとりつきてかたへも入ぬ

かこと(片 戸)柴の(夫)廿一とときと(山里の柴のりた戸のかたひさしあさり見
あるりの宿りな

りたとき(片 時)後撰(戀)二「片時も見ねば戀しき君を置いてあややくいく夜なりよねぬ
らん(夫)廿八 兼輔「片時も見て慰さまん昔よりうれへわさるゝ草といふあり(新後拾)

戀二「心をばならぬ物といふかれどりと時のまもわされやいさる(源 稚か本)十
元真 世よ片時もながらふべき(同 繪合)十 火鼠の思ひりと時よきえたり(竹取)十 汝

がたせぬよとして片時のそとくどい、と云かくや姫と養ひ奉る事二十余年よりぬ
片時との給ふよあやしくなり侍りぬ(枕)七十一なぞ、詞もと更し負させんと
れるをそと片時のそとよ思ふを(抄)シバシノ(源 若紫)卅いと哀れ見奉る御あり
さまを今のまゝして片時のまもおつづのあゝるべし(同夕顔)九卅片時たちをなれ奉ら
せ(枕)八世の中の腹さ、うむづのう片時あるべき心ちもせでいづちもく、い
きうせをそと(補)いせ物)三十ろうそうのうへのきぬとたかたときに見いどして
やるとて(うつほあて宮)廿火をつけてかた時よやきろろぞして(同菊の宴)十かた
とき世にふべきこ、ちせねば

あたどる 象(神代紀)上、世人或有雙生者象此也

りさち 形(神代紀)下、廿骨法非常(万)十六、いなもうもおもひんまゝにゆるをべし
のたちみゆめや我もよりあむ(雄畧紀)六形容温雅(源桐つは)十繪にかたる楊貴妃

のたち(同夕顔)十のたちなんのりなれど(いせ物)六のたちのいとめでた
くおはしなれば(源桐つは)三 いそぎ参らせて御覽ぎるにめづらうある兒の御々
たちなり(同橋姫)十いとかくをささき人くを見すてんうろめとささのりに
なんえひた道よりさちをわかへぬかどへどてなく物がとり給ふ(同夢の浮橋)九

御りさちもことにかり給へるを(同朝顔)廿おまめかうかさちよき女のとめ

よの猶ひき出つべき人ぞり(うつほ國讓)下、十いでや形あるもいひさわひあ
まり聞よく(源玉かつら)八りさちある女をあつめて見んと思ひける(同東や)

七かたち心もそぐれて物給ふ事(同紅葉賀)廿采女藏人などをわかさち心あるぞ
バことよもてはやし思しめしなれば(同松風)七こよなうねびまさりよれるかさち
ははひ(同末つむ)九いとわろかりし形さまかれど(同葵)九さらぬ御隨身ども
もりさちをがさまゆくと、のへて(補)玉葉)戀三入道前こひさのあがめの末よ
りさちして泪ようかぶと平山の松

かさちがひ(夫)卅六「あふ事りりさちがひかりさ、むまび世々のむくいのちぎり
つらうか

補かさちぐさ 形草(拾玉)六「うゑてはりわが後の世のりさち草身をて、すむ宿
のかさねよ

かさちひと 形人、男女に通して通(うつほ國讓)上、廿二實忠の かくふようよまな
のよたといふ 姫君の事を

奉り給へるいかよとてくれ給ひかど見奉りりり皆かたちひとよこそ

(同初秋)上五十二仲 此頃いとめでたきかたちのさりりなり父おとさるかたち
忠の事を

人よてつらねて参り給ふ(源 桐つは) 廿きさいの宮の姫君こそ云々ありがたきり
たち人よかんと云々(榮根合) 四十 といへの中納言いと花やかまきよけよりた
ち人と見え給へり堀川の右の大殿こそいかたちの名とり給へりかば此殿をらも
皆いとよく物給ふあるべし

りたりぐさ 話種 (舜水文) 受上國之榮作千秋之話柄。話柄 話資

かたり 語次のカタノ所に

かたぬぐ 肩ヌ 神社の行幸物まうでの時の時ハ求子はく、後公卿以下(世俗淺深秘抄)
十八かたぬぎて舞事ありカタオロシといふ則是也

雖里内露右肩人多之然而猶可依使也雖大内主上自上戸小部有御覽仍奥座人露左肩
是一説也但於處々推參所者必可露右者也(源わか) 十七 もとめこそつる末よわか
やかなる上達部のかさぬぎており給ふ(續古事談) 一殿上的一種物云々人々皆かた
ぬぐいろくの衣どきたり用意あるるべし(補) 著聞 十まゝ男りたぬぎてたつき
ふりかたけて

かたぬぐ カ 鹿(古事記) 九 内拔天香山之眞男鹿之肩拔而。契云龜占の後
代に鹿の肩骨を扱と(堀初) 匡「かこ山のそらかゝをさうらとれてかさぬく鹿の
妻こひかせそ

かたぬ ムスブ (江次第) 十四 元日先召外記問諸司具否云々 但腹赤奏遲參之時七日

奏之若又當卯日有卯杖奏返給之時故攝政於宮中被結故土御門右府稱小野大臣例不
被結(万) 十 廿 「あら玉のいそつとどひとときもみぢわれはしがたぬあひん日ま
つ(同) 十八 年のうちのこと可多禰もち玉ぞこの道よ出さち

かたる 語 (安康紀) 十 談此云箇 (新古) 哀傷 匡「よもせがら昔のこととせつる哉かたる

やうつ、ありしよやめめ(源手習) 四十 いむ事うは奉らんとこのまひつるとかさる
(同 桐つは) 十 御しなれがちよておそしませとかさりて(同 常夏) 初 かたりてき
かせ給へ(古) 戀一、讀 人不知 「忍ぶれはくるしき物と人しれを思ふてふ事誰し語らん(万)

十七、「時鳥今しきをなむ萬代よかとりつくぐくおもゆるかも(源末つむ) 十いよ
十一への事かさり出て(散木) 上七十一云々田上より都へのぼるとて紅葉のめでたか
りしよし都の人にかたりちらさんちやければよめる
「嵐とや都の人思ふべき紅葉の色どかたりちらさば(新六) 五衣笠「ととへて
思ひしよとの心どわかたりあらはすことのももなり(源 帚木) 初 忍び給ひけるかく

ろへととせさへかさり傳へん(万) 三、五いかりととの語りつらんか(源 帚木)
九まきのあさりどめきてりたりかせ(万) 十一「かくれぬの志にこふればあき
さらせ人よかさりつひむべきものぞ(源 帚木) 廿式部が所よどとさきあることいあ

らんそこしづゝかたり申せとせめらる(同)九さまんゝの人のうへをもどかさりあ
とせつゝ(同)十ちかくてまん人の聞わきおもひしるべあらんよかさりもあせせバ
やと打もゑまれ

りさどならぶ(古語拾遺)六佐命之勳無有比肩(濱松)上四つひまかたせからぶる
人いできぬめりなどいそむもくるしう

りさわれ月に六(夫)十三「過かざる宵曉の片われをひとつよせめる月のか
いふ信實」
少かき(拾遺)戀三よみ「あふ事いかさわれ月の雲隠れおろろ夕まや人の戀いさ
人しらす

補(二條皇太后宮大貳)「かきくらは雪はの雲よりうづもれてりさわれやらぬ月の影
かを返し「降さらせゆきけの空の雲間よりかさわれ出る月とこそこれ(金葉)」
雜上
行尊

「木のまもるかさわれ月のほのかよも誰かわが身と思ひ出べき

かさわれぶね(千載)雜下短(堀太)散木下州一云々いそでいえこそなぎさある
長歌

かさわれ舟のうづもれてひく人もあき云々

かさわ片輪(沙石集)車の事によそへて
いへることあり

かさわき(うつほ)俊かけ中つやゝかよめらかあるくら針よそさどの糸をぞ左
系右糸よよりて一ひろりたわきをかりせれたるを

かさわきて(同)祭の使りくて右の馬づかさ御馬左右大將とうよておそいます上達
黨頭

めとこたちりたわきてくらべ給ふ(後拾)上秋三條太政大臣左右せかたわきて前裁う

ゑ侍りて歌よ心えたる者十六人をえらびて歌よと侍りたるよ云々兼盛(續千載)下春

堀川の院御時中宮の御方よてかたをわかつて花を折りよつりよして御前よたてあ
らべて云々

かさりそやぶ(保元物語)山田小三郎伊行といふの又あき剛の者かたかそ破り
の野猪武者あるが

かさりそやぶ案するに古き物語文よカタホと
いへるの此カタホといへるか(盛衰)十教盛新院及爲義忠正などを

夢よ見さる時此由かくと内々申給ひれども入道のさる片顔なりの人よて更よ用
る給そざりける上云々

かたかど(源)源木五親などたちをひもてあがめておひさきこもれるまどのうち
なるそどのたゞかたかどを聞つゝへて心を動す事もあめり(同)同そのかたりども

あき人のあらんやとの給へ(同)八そかなく出たらんことわざも故あからせ見
えたらんかたかどよてもいかゞ思ひの外よをかしからざらん(散木)下(堀次)夫

二「石いさもたてたる人の心さへかたかどありとみえもする哉
堀夫

増補新編言海集 卷之十五

かたど 片方の心也(古)別友則「またの帯の道のかたど」わあるともゆきめぐり
てもあそんとぞ思ふ(千載)哀崇徳院かぎりありて人のかたど別るとも涙をどよも
とめていかか(宇治拾)十一十七さりとして去出さんとまちてねざらんもわろかりか
んと思ひてかたどよよりてねさるよよて出くるをまちける補(宇治拾)今か
さよのかほよかたつたりたれば

かたど 方々心也の人々の(前太平記)童子打わらひていざ〜かき給へ我の又か
くの饗應はあづかりかんとて引よせ〜打くひて(源桐つぼ)三世のおぞえ花や
かかる御かたどよもおとら補前の古今のまたの帯の云々千載のかぎりありて
云々を片方の條よ出せるハ誤也こよ出すべ(後拾)賀保昌「かたど」のおやのお
やどちいよふめりこのこの千代をおもひこそやれ(金葉)雜上周防内侍「そとわびてわれ
さへのきのの草花のおかたど〜たきやとりか(源若菜)五百宮をバかたど〜
まつていとやんぞとかくおもひ聞え給へるものをとかたり給へバ(同)下「まつ
さともいかゞきくらんか〜よころさわがを日ぐら〜のこゑ(玉葉)旅右大臣「た
び人の行かたどよふと分て道あまあるむさ〜此、原(同)釋教「かた〜よわか
ぬ光もあらされて行をるとなくてらを月かた(万代)親成「かた〜よあそれつき

せぬねざめか山おろ〜ふきて時雨ふるあり(風雅)雜下「かたど〜よせ〜むべ
き世をおもひてて、まことの道よ入ぞか〜こき
かたど いろくイロクサマドにカレコレ (源帚木)六人の心ど〜云々わかるべき事
かたどおろかるべき(同)九あ〜かるべき事どもかんかたどよおほかる(狭衣)
十四いとゞわづらひ〜さもかのめからむかたどよ心の乱れて(源橋姫)一筋こ
とあるべきおぞえかとおそ〜なるを時うつりて云々いとをどりかく御う〜ろ見か
ども物うらめ〜き心〜よてか〜よつて世をそむきさりつ、(同末つむ)廿
物の音ども常よりも耳か〜ま〜くてかた〜いととつ、(同紅葉賀)十おもての色
かえる心ち〜ておそろ〜くもかたどけかくもうれ〜くもあそれよもかたど〜うつ
ろふ心ち〜て涙おちぬべ(同松風)十六あさきねざ〜故やいかゞとかたど〜心つく
され侍る(同橋姫)四十院の女一宮をや〜給ふ御とふらひよ必参るべけれをかさか
さいとまかく侍るぞ(新六)二知家「海山やいづくよとそんよをわたる道のかたど〜
ありといふあり

かたかか 片假名(うつほ國讓)中四男手とまぢがきにかきて同ト文字とさま〜
よかへて書たり 歌云々女手よて 歌云々さ〜つぎに 歌云々つぎよかさかな 歌云々あ〜

増補新編言海集 卷之十五

て歌云々といと大きにかきて一まさみ(狭)十四上うそかうなる御扇のあるぞ云々
歌云々とかたかかき書つけて(同)三下四大将手すさびのやう「かつみれどあるのあ
るにもあらぬ身と人の人とや思ひをそらん(うつは藏開)中十からのまきと中よ
りおしどりて大のさうしに作りてあつさ三寸さかりよて一よ例の女の手二くど
りよひとかたかき一よさうくどりおあすと一よかたかんをひとつあひあ
てまづ例の手をよませさせ給ふ

りさかこ堅香子万十九「ものゝふのやそのいもらりくみまかふてらるの上の

かさうこの花後にカタカシとよめり或云京にてカタコユリといふものあり漢名王孫また早藕といふとぞ

補かたかけ(大和物)「かたかけの舟にやのれる白をみのさわぐ時のとおもひい
づるさみ(躬恒集)「かたかけの舟にやのれる白をたつわびくおもゆる

りかて行意あり(新勅)雑上「さくら麻のりりふのそらとふふこれバ外山かさか
秋風ぞふく(續後拾)冬後一條入道前「草の葉も早霜がれの色とえて外山かたり

冬に來よけり

かたおりて(新六)三光俊「夕波の湊かたかみつ汐よをさきつり舟さしわたを見ゆ
(同)六四行家「床の上に手枕斗かたりてをばしと思へばねぞ過よる(同)六二「みか

月の空かさかけて秋たつといふ斗よ風ぞ身よまむ(源松風)四何かそれもりの殿
の御かたにりたかれてと思ふことありて(同)手習九山よりたかたたる家おれば補
(月清)二「のきさよりまがさの草よりたりて風よりぎりれさゝりよのいと

かさかき(新六)六衣笠内大臣「妹がくむ寺井のうへのかさかきの花さくそとに春ぞあり

ぬる(同)知家「小車のもろわよかくるかさかきのいづれもつよき人心かを(同)光俊「人
心をへて思へばかさかきの花のひらくる時もあり(現六)為家「たれかえん身をお

く山よとふともよあふことのかたかきの花

かさかき(和名抄)十六饗鐘四聲字苑云饗鐘加太加之半熟飯也

かたかくれ(續後撰)戀一「谷深み岩かさかくれ行水のかげをかり見て袖濡せとや
俊成

かさかひ片飼拾遺の抄方違逢事のかたさといひかけて拾遺戀四よみ「あふ事
片飼しる奥州の駒とうけたり

のかさかひしたるまのくのおまそくのおもゆるを(兼家卿長歌)「かさ
のひのこまやこひつゝいをかせんと思ふ斗ぞ哀がるべき「たらちねのおやもゑる
らんかたりひの駒やこひつゝいかりせん

かさより(新六)五知家「いかよせんかさひら布のりさよりの身をかくべき物とや

ひみる(同)一衣笠内大臣「蛙かく池のうき草りさよりのさえてわかるゝ夏の夕風(万)十、
五

十「秋の田のほむきよきるかたより」我の物思ふつれをきものを(後撰)秋下源頼

「夕日さす野の薄かたより」まねくやあきをおくるるらん(夫)十一「花薄は

むの糸のうたより」くくるればのべは秋風ぞ吹(詞花)戀上「風ふれはも」はのれ

ふりかたより」あびくを人の心ともかか(堀太)柳公實「朝まどき吹くる風ままりを

ればりたより」り青柳のいと(源こてふ)廿「うたより」はの聞て(三金)「風ふ

れば柳のいと」うたより」あびくにつれて過る春りか(新後)秋下後「小山田の

いあさりたより」月さえてほむの風露みざるかり

「かたよる(拾遺)秋好忠「まねくとてたちもとまらぬ秋めえあせれりたよる花を、

きりか(夫)十一基俊「万代」あざの、心もいらぬ秋風あわれりよよる女郎花かか

「補(好忠)「寒さの夜とよまさるをよ竹の風かたよる音のさやれさ

「かたがへ」方違(山槐記)「今夜爲方違向楊梅(源帶木)卅「いづくよかかた、がへ

ん云々(同)卅「志のびく」の御かた、がへ所あまたありぬべれとひささくは

どへてわたり給へるに方ふたて引たがへ外さまへとお平さんいとはさきあ

るべ(貫之集)ちかどかりある所かた、かへある女のわされると聞て(古今)

上「雑かた、がへ」人の家まかれりける時(枕)二「ましましき物方たがへ」行た

るああるトせぬ所(いせ集)卅方違ふとて京極ある人の家いきて云々(大和物語)

「かたのふたがればこよひいえんまうでぬとの給へりければ」あふ事のかたの

さのまどふたがらん「よめぐりの君とをれ」(新六)五「なぞするあらぬ所

にふしそめて我をあきたつかた、がへと」○かた、がへ天一神のある方に向ひ

(江次第抄)「天一己酉至甲寅六日在良方乙卯至己未五日在卯方庚申至乙丑六日在

異方丙寅至庚午五日在午方辛未至丙子六日在坤方丁丑至辛巳五日在亥方壬午至丁

亥六日在乾方戊子至壬辰五日在子方癸巳至戊申十六日在天上天一在天上之時向乾

拜之爲秘事(千載)春白河殿御かた、かへの行幸(月詣)七法勝寺へ御かた、か

への行幸侍りける時云々是同時の事也○かた、がへの事源氏帯木巻諸抄物にくとし

「かた、より(夫)卅(新六)三信實「ままかか」塩風さかりおとづれてかた、よりの

きあまの宿哉(山家)上「山がつのあら野を」めて住をむるかた、よりの戀も

そるかを

「補かた、ふね(万代)戀三「うらふれて行あふまちのかた、舟さてもかひなき名こ

そつらとれ

「かた、ふね(夫)廿(新六)三衣笠「いよーへいともりこーかた、ふなつ、

片田(夫)廿(新六)三衣笠「いよーへいともりこーかた、ふなつ、

内大臣

みやさがる中の玉づさ

かたそむ片端(源明石)四十よある岩の片をさし腰もつきそこかひて(榮さま)

三みそのりたを心よりさし出させ給ひて(源紅梅)六人しれまを給ひぬべし

のぞきありき給へどたえてかたをばをさしえ見奉りさまを(同 總角)六十御ぐ

の打あびきてこぞれ出さるゝかたをささかりはのかに見奉り給ふが(同 螢)七神代よ

り世にある事をさるゝおさけるをり日本紀をさるゝかたをのぞか(同 梅枝)七

巻でとに手の筋をかへつゝいみづ書つくさせ給へる云々御覽せむにつさせぬ物

哉此頃の人の唯りさそをささむにこそありれをさめ給ふ(同 蜻蛉)五十

歌云々と書さるてささるゝをさかれとよいつきて大方目やをけれ(夫)卅(新)

二知家「雨ふればかたをさつくるいまさとの古道とめておつる山水(夫)廿九「あり

とても人あをさめぬをさの木のとよりたをばにささるべきかか

あたそむ神社の(新古)神祇「夜やさむき衣やうをさりたそぎのめさあひのまよ

り霜やおくらん此歌(六帖)六下「夜やさむき衣やうすきりささぎのめさあ

ひの橋お霜やおくらん(夫)卅四「りさそぎのめさあぬ間よりる月のさえてそ

そぎの霜はおくらん(新古)戀二「わが戀のちぎのかさをささかさくのめさあ

で年のつもりぬる哉(夫)卅四違法師「やいらぐる光や空よちぬらん雲よわけいるち

ぎのかたそむ此歌の出雲の大社に詣て見侍りなればあま雲さなびく山の中迄か

そぎの見えゆるかん此世の事も覚えざりけるよよめると云々○ちぎのかたつ方

よぶ補(續千)神祇よみ「宮居せし神代おもへさりさそぎの行あひのしものしふ

どぞりより(玉葉)神祇「あまくさる神や願ひをまつしそをの湊よ近きちぎのかさを

かたつ(長門平家)十五猫間木會よろづ興さめてかたつをのみてましゝなるよ

(盛衰)十二この扇たれにかいよと仰かれんと肝をまをさつくりかたつをのめる

ものも有(明德記)中一皆手に汗を握り難津を吞で在けるが

かたつか片つ(源紅葉賀)廿かたつりたし手いいとささぎされとよしなから

せ云々かきをさびさるを(枕)五たまのさる扇どもの中よかたつ方に日いと花

やりよさし出し旅人のある所云々をかしうりきて今かたつ方に云々かどぞかさ

さるよ(源空蟬)二十この御さし紙のりたつりたよ(同 夕顔)九うらもかくまち聞

え顔なるかたつりたの人を(同)四十かのりさつ方い藏人の少將をりよまを聞給

ふ(同 若菜)上八りひある御こととよろこぶ物からかたつかたよのおやつりかく

かかき事の打をひてたへぬを補(更級日記)きよとがせきのかたつりたのうと

るに(枕)六七、廿もの木わりたちてさしいでさるりさつりたのあをくいまりた枝の
補かたつかひ(海道記)「たのめつる人のあぎさのりたつりひあそぬにつけて身と
うらとつ、

かたつき(新六)一 知家 「み山ちを岩根りさつきよりつ、月と共と猶ぞやをらふ
(万)八、「雪を置いて梅をか戀をあー引の山かたつきて家るせる君補(万)六いさかと
り海りさつきて(同)十九 谷りたつきて家とれる云々

かたつま(玉葉) 旅云々 扇つかさける中繪もか、ぬ扇のりさつきまに書付侍り
はる惟方

かたつふり(和名)十九 蝸牛 加太豆 不利益 貌似蛸輪背負殼耳
かたつり(新六)五 光俊 「のちの世のあきと人のこひさとかたつりからぬ身のお
もひりな

補かたね(和泉續)堅根やむと人のもとかりいひたる人に五月五日いひやる「はふ
ごにも引やのせてぬかくれぬにおふるあやめれたねなりとも

かたねふり(夫)九(新六)一 信實 朝臣 「此よそ、まどふけかくに老らくのかたねふ
りせるともいひのもと

のたを 片名(盛衰)八 平左衛門のせう重國といふ侍と云々 重ひら卿のせさかくよ
りふびんのものにおもされてみづからあそびせ給ふりた名をたびて重國とよ
まれけり〇 西行 「高とあるとくりの山のそと、ぎをのがかた名ととぎをを鳴

かたか 腰ニ帯ス(和名)五 十刀子、刻鏤具、漢語抄云刀子 賀太(小大君)十 此おそ直
衣姿にてきてこよひの内とのあかりこれおきたれとて蒔繪のさやに沈のつかさ
しるる刀をおきていぬるが三日斗音もせざりけるに刀とりて見けるにさびりり
れバ女「ときおきさやの刀もさびにりさしてひさしくやへぬらん(夫)冊

(新六)五 衣笠 内大臣 「何事を思ひたりともあられトなるとのうちに刀やのあき(六帖)
四「刀もて流る、水のきりつとも人の心といふたのまん(六帖)五「あふことこのり
ささしたるな、つみのさやりに人の戀らる、哉(新六)五 爲家 「さてやらで身のさ
びもてぬふる刀ささかよ世とバ思ひさてども(同) 知家 「今いわれまろそにどける
こしりさ世よつかされぬみとぞ成に(同) 行家 「やまと歌のこしをかれさる鏑
刀さも世にた、さきくもあきりか(補)小大君)十「かねよわとかへるかさあよ身と
かしてつりのまもなくこひやわらん

りたか 刀。物裁(和名抄)八十四 剪刀、裁縫具、剪刀俗云毛乃多 所以裁衣裳也(拾遺) 戀二

人し「から衣われハ刀のふれなくまづこの物のかき名ありなり(いせ集)「あはぬともたトどぞ思ふりらよき人の心トくさへらねを(夫) 十五 兵部卿元親王家歌合よみ人しらす

「紅葉ハ霧のさつにもちりねると風を刀と思ける哉

かたな 刀。庖丁(うつつは 職開)上 まるり物のかたなをまをいとせさへ御まへよて手

づからといふさりりよて(宇治拾) 九 且ふの庖丁ハ仕らんといひてまなをさしはづり鞘をる刀ぬいて

りさかり (うつつは 國讓) 十三 十四 姫宮もおきあがり給へるとこれのまどあひさくこの

かりよてあてなり(同 嗟職の院) 六 まどかさかりよていとせりトおををかり今

そこへぬび給ハいとようかり給ふべき人よこそ(源神) 六 さとくおとかび給へる

さまよ物し給へどまどいとかさかりよかん(同 せとめ) 三 十四よかんおそしなるり

たかりよとえ給へといとこめあしう云々(同 玉かづら) 六 姫君のきよらよおそしま

せどまどかさかりにておひささぞおしをかられ給ふ(同 竹川) 四 みやを所の御こ

とのねまどりたなりある所ありしを(同 若菜) 十 十四 姫宮のたままどいとちひさくか

たなりよおもせるうちよ(同) 十 八 九 十 たりたなりある御心よまかせていひ出給へるも

らうさればバノヨクト ハヌ 也

かたなごま 刀玉(發心) 八 十 田樂さるがくかんとの中よ刀玉といひてあやふさわ

ざせる者あり是をみれを刀六と三人してとる宗と上手ある者トバ中よとて、前よ

むりへる者一人うしろの方よ一人おのく刀三をもちて前後より我おとらトと

やくかひりくるを中よて前より投るを取てうしろへかひやり後よりなぐるをを前

さまへなややるをべて六の刀猶とかくさわぎやるさま凡夫の志わざとも覺え人

傳よさかバ信せべくもあらぬ事也

かたなびき (新六) 二 (夫) 十二 「秋にあへる山田のそごちふく風よなどて心のかた

なびきある(頼政) 上 廿 「吹おろそ嵐や間かき小塩山を野の草のかさなびきせる

(右京太夫) 「夕されバ夏野の草のりよなびきをぐとがてらに休む旅人(夫) 十一 野宮

「山おろしやたえせふくらんあそづもら尾花が末のりたかびきなる(同) 卅 四神祇權

「とも岡のさよの葉しり雪ふればこしよさしたる片なびきなる

りたな カタマ の所お引る(江) (夫) 廿 (新六) 二 信實 「世よたへぬ大内山のりたな

よふるきがうかの梢をぞ見る(夫) 卅 (新六) 二 禁中の「立よりてまづそてみせし

たかしの軒の下こそわすれがたけれ(夫) 卅 都の所万代「いよへの奈良の都の宮

柱此かゝなり猶のこるかな(續後拾)中雜外記廳結政座古宮の柱の今よのこれる
とまつりてどのついでよきてよめる中原師「いよへのからの都の宮はしらの
かたかゝり云々光朝臣

り江次第御飯堅樂仁給(同)注十七飯堅給早速意也大膳設飯給
使外記史以下也

かたらふたい物がたりする事也事也(万)四四「あひひきの山さち花の色よ出てかたらひつきて逢
ともあらん(同)八五廿廿いつりも都ぞとむと思ひつゝかたらひせれば(源 若紫)四十

今ハ世よなき人の御事りひなおのれあればなと語らひ聞え給ひて(同 帚木)
廿九時く打りたらふ宮づかへ人あとのあくまでさればみ過たる(万)五よ不

鳥のふりからびるかたらひい(いせ物)十六ねんでろにあひかたらひる友さち
のもと(夫)十四六百番「ひとりふをかく夜のりをさまらひあかま

きりくをらか(散木)中九肥後君と修理大夫行宗といひかたらふ中よて常歌よ
とかをと聞るよ云々歌云々とよておくりたりけるを見て此歌の心にていと

ゞのかたらひよていあらざりけりとみえければ云々
りたらふ男女のことにいふ今物いひそむるこ枕十二ある女房の遠江守の子を

る人をたらひてあるがおなト宮人をりたらふと聞て女うらみれば云々拾遺

冬女をかたらひ侍りけるが年頃よかり侍りればいとく侍りければ(いせ物)二そ
れどりのまめ男うち物かたらひてかへりきて(源 總角)七十此君の御もととある人の

いつりかとこなるわりき人をたらひよりたるありなり散木上中宮の御方
よて人に物申けるよ時鳥のほのかにきこえければ女のよめる「君と我ことかたら

へ郭公おのびねると人やきくらん返「今夜さいねよあらそれぬ時鳥かたらふ
事のあるしと思ん今物語五いとうつくくる女房のひとり参りあひたりけ

る見てがたく覺えけるまいひよりてたらひければ大方さやうの道よか
かひがたき身よてあんとやうくいひろひけると猶たへがたく覺えてりへり

るにつきて行ければ(續紀)廿可多良比能利多言平聞仁補(新後撰)三夏「まつ人
をかどかたらいでとぎをひとりのびの岡よかくらん(同)同基「ほとぎを

まれよもこれかたらいおのがささと身よららる(万代)春下「吹風のさ
そふに花いちると見きたがたらふ春いぬらん

かたらふ頼事也(皇極紀)十速發軍旅述王所在於高向臣國神曰云々源松風三宿も
りのやうよてある人をよびとりてかたらふ(宇治拾)八陰陽師をかたらひて志き

をふせさりけるあり(風雅)夏接察「我さめの聲よもあらどほとゝぎをかさらへとゝも
なと思ふらん(玉葉) 雜一「公雄「不とゝぎをさのみまた下うき身にけりさらんとぞ
ねもをいむらん(續後撰)戀四「おのづからおもひあをせる人もあらをかたらぬ夢
の世にやもりあん(新千)夏冬「あゝ引の山とゝぎを待わびぬかさらひかれゝの
のみ斗よ

かたらひとる いひくるめて我(源玉かづら)十此家の次郎をかたらひとりて(同)十三
次郎がかたらひとられたるもいとおそろしく心うくて(同手習)五十忍びたるさま
は猶かさらひとりてんとおもへば
かたらひちぎる たいいひ約束(源若菜)五百月の内に小弓もたせて参り給へとかさ
らひちぎる

かさらひよる 前ふ附す
りさらひがとけ (源東や)八かさらひかさるるりほしてちのうるよりていふやう
りさらひつく 頼む事にも男女(夫)廿物語(六帖)五「あゝ引の山橋の色に出てかゝ
らひつきてあふ時もあらん(源若菜)三十忍びてかさらひつき給へりけるを(同紅葉
賀)廿つきせぬ好み心も見まをりうかりよけれをかさらひつきにけり(同蓬生)十侍

従もかの大貳のをひどつ人かさらひつきてとむべうもあらざりければ(同夕顔)
六老僧のあひちりて侍るよかさらひつけ侍りぬると聞ゆ

補 かさらひぐさ (万)十七、よろづよのりさらひぐさといまど見ぬ人よもつ々む
のさらひあひせ 相談す(源玉かづら)三十いゝのつあうまつるべらんりさらひあ
ひすべき人もなまれくのはらりら此監はおお心からせとて申たがひにさ
り(同總角)九十とめでさかるべき事にいひあひせてさゝいれ奉らんと皆のさらひ
合せけり(同早蕨)初 心細き世のうさもつらさも打かたらひ合せ聞えしにこそ云
りさらひあかき 己に出す

かさらひ人 物たのむ(源若菜)下五十小侍従といふかさらひ人の
のさらひ人 物がたりす(源源標)十めのとも此女君の哀し思ふやうあるをかさら
ひ人よて世のあぐさめよけり(同末摘)四 さんをぞかつりきりさらひ人と思ひ
給へる(万)十七、雁チ 遠ッ人(同)十、廿郭公チ 契云琴ハ聲アル物ナ
レハ語ラヒト云云

りさむ 固(古事記)上卅作堅其國(續後紀)十九葦管 遠殖生志津國固 米造介牟(玉葉)
四 雜元暦元年世中さわがしく侍りける頃平行盛備前の道をりさむとて壇の浦と申所

侍りけるよ(源明石) 卅 さうとの内に入りていのでかさめけるよ(いとつよきを)

(山家) 下「みもそその岸のいはねよよをこめてかためとてさる宮さしちかか(万)

九十 此はことひらくを夢とそこらくにかためしことを(同) 卅五「いさこともさ

わさあせそ天地のりためし國ぞやまとしまねの(散木) 卅八「時しもあれ名よあふ

坂の杉かえに山郭公關のさむかり(夫) 卅六集西行 「こけうづむゆるがぬいはのふるさ

根の君が千歳とかさめさるべし(源蓬生) 卅四板垣といふ物打かためつくるのせ給ふ

補 りどむ(字鏡) 卅加太 **(靈異記)** 斯と可陀彌かと訓るも直ならを偏りてものる方

よつきていへる言あり

りさむく 打かさむく共よりたふくノ傍ニ出ス

かさむさび(夫) 卅三方 逢ふ事のかたむさびるわきもこがぬはたの紐よいつか

とくべき(同) 同洞院 「紫のこぞめの帯のかたむさびとけてぬる夜のかぎりあらせ

の(新古) 卅三俊頼 「あいのやのうづはた帯のかさむさび心やそくも打とくる哉(後拾)

相摸戀二 「もろともにいつかとくべき逢事のかさむさびあるよはの下紐(夫) 卅九寂蓮 「山

かけのさよき松がね枕よて岩もる清水かたむさびせん

かたうと 方人(散木) 卅六「物思ひの心くらべのかた人よあるともまけとたぐひを

さ身の(枕) 卅四仲正 何りのきんかとも天人おるばかりひきていとわろき人ありホマ

マリヤトイフ也 かの御娘やのえたるといへさハ 仲忠が方人と心ぞえてされよと

いふよ云々 (同) 卅七十ナツ 其日よなりて皆方人の男女るわけて(同) 卅八十 すべて

物聞えむ方人ととの聞ぬれさ人のいひふるしたるさまよとりな給ふかといと

トうまめどちてうらといふ(狭衣) 卅二上 卅二中 納言の佐と大將の方人あり 此御方人よ

おぞしの給ふの此事も必おぞしうとがふらんかといとあぢささく云々

かたうた(古事記) 卅下 那賀美古夜都ヒコ 斯良牟登加理波古牟良斯 此者本岐哥之片

歌也

かさる(和名) 卅一十 乞兒和名加 (宇治拾) 卅二十 心をのかたるといおのれがやうを

る物をいふぞか(土佐日記) 卅下 此梶とりの日もえさからぬりたるかりとり(いせ

物)八十 そこよありけるかさる翁いさしきの下よとひあるきて(大和物) 卅五あい

かひたる男のかたるとのやうあるをがさる。和訓葉ニかたしノ所ニ注セルハ誤也。

罵リタイヒ又カタ井翁ハ卑下シタイヘル也 **補** (枕) 卅六あひしげ 年老さるかたるとさ

むきをりよもあつさよ(宇治拾) 卅三 ちれとといふかたるといふに(同) 卅五和

尚りゝるかさるの身にて候へ

補 けたくち

片口(著聞)二十四 けたくちのてうしよさきせいで

加茂

かこくるし

片戀片思の類にて(蜻蛉日記)上まおな晦日ある所はおかや

うまでまうでりふとさきとつ、下のよ「さかささのときのかきまよゆふしてや
かたくるしかるめなとせを神

かたくか(夫)

一(仲忠家集)後園「かこくかやちりへのそのよわかかつまかま

ありく翁姿よ(源桐壺)十一とゞ人わろくうこくなまかりまつるも(催馬)夏引かこ

くかよ物いふせみなかを云々(源帚木)廿あやまちして見ん人のかこくかゝる名をも

さてつべきものかり(同手習)七かこくかにまきどくもおぞされぬべ(同若菜)

上このみちのやまよこちまどりかこくかゝるさまよとて(同をとめ)二十人のうへ

よてかこくかゝると見聞侍りしと(つれく)一段 屏風障子などの繪も文字もこの

くなゝる筆やうして書さるが見よききよりも宿のあるトのつさなくおぞるかり

(かけろふ日記)廿よそこよりといもこをかこくかゝる見ぐるしからめとて(補

(源常夏)七おぞきことつせぢよてかこくなゝりといや(同夕霧)廿さるりこくかゝ

きものたまもられ給ふ(同須磨)四十心ぞやりていふもかこくかゝる見ゆ(同總

角)九かこくなゝきわざかれ。信友云かたくかといふハ頑あくるといふ
言と添たる也クナハクナツレのクナ也

かたくか(源空蟬)

九いづこよまひまぎれてかこくなゝと思ひるたらん(同をとめ)

八うたくかゝき姿あどをもそぢかく(同明石)廿いとゞをこよかたくなゝき入道の

心をへもあらわれぬべかめり(同夕霧)廿鳥のせうやうのものゝやうなるいかに

人わぶらんさるかたくなゝき者まもられ給ふ御さめにめたりからせや(かけ

ろふ日記)二たよそこよりといはゞこそかたくなゝ見苦しからめとて云々(狹)四

卅九今姫思ひかゝづき聞え給ひかバかこくなゝかり御心もおのづからもてり

君の事を(源明石)二紫の使云々 かとそりどくもあらせかこくなゝりうりさりなせ

くされて(同末摘)廿あびら引ひつたたるこいつきりこくかゝり夕霧(同初音)十中將を

どをばそくくしおぞや人にななしてんとかん思ひおきしづりらのあされ

をみたるのこくかゝりさひもておかれよと思ひかバ

りたや(片矢)

(堀後)(夫)仲實「はるされバたかやとさきともねうちわがから弓の

りそをかされるをさしける(堀イ本)

りたや(片山)

(夫)十九權僧「かこ山のそそのかぢの横雨にそりさとどにゆいそ

でぬれ行(新六)一家「うづかたくかた山まよたつけふりりさねてかむ春の夜

の月(万)三十「こらかかまきゝのよろし朝づまのりた山ぎし霞たかびく(玉葉)

春上鎌倉「うちかびき春さりくれバひさき生るりた山りた鶯ぞあく
右大臣

補かこやまつさき 片山椿 (万代) 冬仁和寺入「まゝを原やゝまつ霜のおくまゝ片
山椿とどりのこれり

かこやまざと 片山里 (堀後) 夏薪「こりつゝかたかりせば冬深き片山里い
か

でまゝゝ (拾玉) 「心あらん都の人にかゝらばやかた山ざとの秋のあをれを (新六)
爲家 「嵐ふくかた山里の秋の末をゝろよものをおもふかりなり

かたま (神代紀) 下廿 作無目籠内彦火々出見尊於籠中 (同) 廿以無目堅間爲浮木 云々
所謂堅間是今之竹籠也 (万) 七 籠毛與美籠母乳 (古事記) 上五 造无間勝間之小船

かたまる (古) 長歌 霰とどれて霜氷りいやかこまれるまの面に 云々 (堀後) 同 顯仲
袖のつらゝもむせをれいやかたまれる庭かれや頭の霜もそらひあへ **補** (著聞)

廿一 あかり障子のかたよむかひてかたまりねてまつそとよ
かたまよひ (曾丹) 五月 「わがせこがませりつる見ぬそとよ夏の小原のたま

よひせり (万) 七 廿 「ことゝゆくにひさき守か麻衣かたのまよひのこれとりみん
補 かたまつ (万) 九 十 「冬でもり春べとこひてうゑゝ木のこにかる時をのたまつわ

れを (同) 九 廿四 「くらそゝの山とこのみかよこもりよ出くる月のりたまちがたき (同)

十七、 「うぐひせのいまのなむとりたまてバかそとよなびきつきのへにつゝ (同)
五十、 「うめの花さきちる園まわれゆかむ君がつかひをかこまちがてら

七十八、 「うめの花さきちる園まわれゆかむ君がつかひをかこまちがてら
かごまゝ (日本紀) 倭 (沙石) 三 上是非せゝらむひがみ咎とかくしてかごまゝきい

よゝゝづむことあり (平家) 六 四 けこまゝきもの朝ありて罪とゝかそ
かこまひ 片舞 (百練抄) 十四 有片舞有勸賞 (同) 卅 翌日片舞之間木工寮屋忽以顛倒

あこふち 片淵 (新六) 六 知家 「きゝかたの水のよとこのかこふちよつりをこれる青
柳のいと (同) 五 光俊 「あこふちの水ようきさる青とどりがよとねともあき世也

り (同) 三 結 笠 「山かそのそこのかたのかこふちよわりあゆつるとけふのくらゝつ
十六夜日記) 此川堤の方いとふろくてりゝゝゝあされば「りこふちの深き

心ありながら人めつゝみもさぞせのるらん
りこふとがる (後撰) 戀 二 方ふとがりたる比とがへまるとして (同) 戀 四 あり

て男のこざりければ「あふ事のかこふとがりて君こぞバおもふ心のさふばかり
ぞ (大和物) 一 かこのふとがれをこよひのえかんまうでぬとの給へりれば

かこふく 傾 (古事記) 下 卅 大宮のどとつはさて須美加多夫祚理 (新六) 四 知家 「つれ
づれの秋のあがめのうゝねよをそくひかたのかこふさよけり (續紀) 四 三 傾事無久

動事无^{ウコフコトナク}久^ナ (夫)^{十一}「有明の月へのこれる日かたよも先かさふくの朝顔のむを^宇治拾^三」^四さふるゝことかからむかさふくにあり心と西方まかけんよかんぞ心ざい

とと乃ざらん(万)^廿「秋風よいまかゝと紐ときてうら待をるよ月傾きぬ(夫)

八後^{京極}「五月雨よ柴のいはりのかさふきて軒れをづくれおとぞみトかき(後拾)^{戀二}赤染

門^衛「やせらひでねをましもれをさよふらてかさふくまで此月をこい哉(新六)^三衣笠

「池水此すさきよわさをそり橋もかさぶくまでよふりにける哉(同)^六鳥とま

る竹乃ほ末れよをへてさゝかさふきよがる我身かを(東遊歌)^古ふねかさふくか

ふねかさふくか(源朝顔)^廿とを見出してせこいかさぶき給へるほどよる物をくう

つくゝたり(狭)^三下見合せ給ふに御顔いと赤うかりながらわざと引入りかきも

給せせ御扇よまぎらひてせこいかさぶき給へる御かんざい御くゝのかくりよ

りせとめ云々

○附^りたふけ^是に^他に^いふ^は (續紀)^廿朝庭乎動傾止之天(同)^{廿九}傾奉朝庭乱國家^三(榮月の

宴)^十それ源氏の左のおとゞの式部卿の宮の御事を覺して御門を傾ふり奉らん

と覺いかまふといふ事出来て世よいと聞まくゝのゝゝる(同)けびるゝ打かこきて

宣命よこのゝりて御門をりさふり奉らんとりまふる罪よよりて大宰權の帥よか

して流しつかせといふことをよみのゝゝる(夫)^{卅二}「きよみきのひどりや誰も

かさふらて椎をつみえぬ人のあらゝか(同)同「竹の葉ようかべる菊をかたふらて

われのこゝづむをたきせぞをる

か^さふ^く ^是の^頭か^たふ^けて^もの^思ひ^のあ^るま^じき^松だ^よサ^ヤウ^ノサ^マス^ルとい^ふ必

ま^や狭^衣の^万の^事打^おか^れて^誰く^も見^るだ^よ物^思ひ^しき^と此^詞を^かり^たる^にや^見 (小町集)^六(万代)「物をこそいそねの松

も思ふらめ千代ふるすゑもかさふきよなり(狭)^三下^{卅三}大將ふたゝび入云々いひ

もやらむせかへり給ふよのせきよ一方のうきもつらさも忘られて千代ふる末も

かたふきぬべいされど宮の夢よごよ^補(枕)^八十^五をゝろよふといひさらばあやい

どうちかたふきよまのん(風雅)^{釋教}「わさつをををかかたふけてあらふとも我身

のうちをいりできよめん(著聞)^六まめやかにおもゝろや思ひて打かたふきゝ

聞たり(同)七いかゞさやせくとめたまそんとかたふきあひれを(同)^{十八}瓶子へ

さかか物と座のまへよおうれれれ^々とづらからかさふらのみつゝ(同)同^十猶數盃

もりたふらのみつゝ(うつろ^{櫻の上})^十たいともらうかどたふきあやいさきまかり

のたふく^不審^す事^也(中務集)^廿「神水よかけのかさふく山吹の蛙のこゑをあそれとや

さく(榮見とてぬ夢)^{四十}此内大臣殿を猶御心おきて心をさかくいひのゝあべか

らんとしたぶきもてかやと聞ゆる人々おそかるべし(同)廿四道隆の内大臣殿の
ざわれのみ万よまつりてちおぞいたれど大方の世よの皆打かふきいふ人々おそ
かり(竹取)五玉の枝作りし由竹取の翁此とくみらが申す事何事ぞとかたふきを
り(源をどめ)七あまりひきとがへたる御事かりとかたふき侍めるを(同竹川)廿世
人の心の内もかたふきぬべきとあり(盛衰)廿四人々かたふき申れり(うつは俊かけ)
中子うむべき程にかる迄見ちらざるよ九つきといふに此つかふ女物くせせか
どよ前よ出来て打かたふきて見ていふやうあやしくかどか御さまの例からせお
そよまを云々(源未摘)十六「うら衣云々心得て打かたふき給へるよつゝみよ衣を
このおもりりよ古代かる打おきて出しり(同若菜)十八あやしくと打ちたふき給へ
るさまあればわづらひくして(枕)七其夜の事をといひ出を心もぞえ給ふせうよ
ふといひたらばあやしくとや打かたふき給もん(源桐壺)廿相人おどろきてあまた
さびかたふきあやしく
○附かたむく(うつはたこそ)北方此帯ときぬとむらあまりとどとり出て云々
といへとの給へばそくち打つたむきてとみよとらぎ
りたこと片言(散木)中五十九「あふ事のかたことしけることりこのかこそもいふ
寄小兒戀

よまとぞ聞ゆる(夫)春二小侍従「鶯の谷の古巢のとかりよてまどかたことの初音をぞ
きく(蜻蛉日記)こゝかる人かたことかどるるどにかりてぞある(うつは樓の上)
下六物も覚えぬそ給へり云々たつよとよらひよふれぬ云々詞今日のこ
ざり足もふえたてられ侍らねばといふ聲もかたまとのやうあり(源薄雲)七片こと
の聲のいとつうて袖をとらへてのり給へとひくもいそとらう覺えて
あたこゝろ片心(賴政集)下「あひきてもかねて朝のあたりれてかた心よの物ぞこ
を思へ(源盛)十「あはれなる姫君の物思へる見るよかたこゝろつくか
かたこひ片戀(万)十二「そへもかくりた戀をよとこの比よ吾まぬべきの夢よとえ
きや(續後撰)戀四「あまいとどよりもあひせぬ玉のをのりよこひをらよこれ故よ
りの(古)戀「心がへせるものよもががた戀のくるよきものと人よあらせん(夫)廿
丸「みおそよの玉にまどれるいそかひのかた戀のよ一年のへまつ(同)同俊成「浪
かたる岩根よつるあそび貝こやかこひのさぐひをるらん(新千)戀二順徳院「いよ
しへのしづもた帯のいくかへりわががこひのそよむをさん(万)五「まをら
ぞやかたこひせんとあやしくとも忘このまをらぞ猶こひより(小町)六(新拾)「妻
こふる小男鹿のねよ小夜ふりてわが片戀ぞあかしかねつる(万)十二「かここひあ
身のたぐひとありとしりつ(新拾)

われをぞこふる(同)十五 あがかたてひの志々れをりも

かたえ 片枝(壬生二品)上「ちりそてぬ花も花ぞやぞしむらんかえうつろふ春の

山風(源 柏木)八「時いあればかえらぬ色に匂ひぬりりさえかれし宿の櫻も(同

總角)卅 青き枝のかたえぬいとこく紅葉しるるを

かたて 片手(源 橋姫)七 經をかた手しもち給ひてかつよそつゝさうがを給ふ

かたて 片相(源 紅葉賀)初源氏の中將の青海波をぞ舞給ひるかたてし大との

頭中將(榮 御賀)五 かたての源の大納言の御子のうまんの少將あきもと

かたてや(著聞)十二 此師がかたて矢をたて立たる上より

かたあらし 片嵐(夫)卅(新六)二 知家「山賤のそともの小田のかたあらしあそのつく

りいりめもおろさき(拾玉)一「早苗とるやそのわりのかたあらしこぞのかりた

の淋しかりぬり

かたさる 片去(夫)卅六「きりくしを枕りたさるそやき曉りして夢おどろかそ(寶

物集)七 冥官冥道もいりかささりたてまつらざらん(万)四「いくそまくおもひそ

めかもあまさへへの枕かたさり夢よそえこ(同)十三 夜床片去(頼政集)上廿六

「又もあま秋を今宵の惜めとや身にそふ戀のかさ去よん(うつは 菊の宴)上かくて

催せらの物のしらべをかり物のねどもおなト聲あとのへてあそびすがたのつり

うまつりかどをるそとに頭中將源中將かと聲たぐひかう物奉る人をかささり奉れ

そのあまがしおもてをといふ(源 若菜)上四 いづかたもまかたの御れをひま

あささりそむかるさまにて過し給へ(十訓抄)九 十君が舟し心をかけてよせり

つれども曲の聲し涙落てりたさりぬとてあきさりぬ(同)十 廿 當國の一任の土貢あ

もそぐれり是を見入給とせ女もかたさらせりてつひためしと立給へる國司

の憲法たとへをあらせとぞゆめのしりける

うたさがり(夫)卅三「足引の山にかたたる水そりりかたさがりにも落る瀧哉

かささく 片咲(夫)十一「のべを草の初花りた咲てちまの秋の色をまそしき

かささま たい方といふと同し方角(源をどめ)九 九る方さまとおぞ好きて心ざ

し給ふがめでたき事と云々(同 橋姫)十 十さるひトリのあさりよおひ出て此世の方さ

まいたどくしからんと(狭)四 上 只佛の御方さまをそむき給へるのそぞ後の世の

ため口せしき事し侍り(同)六 下 下とづららの御心おも覺したちしかさまいとり

をかれそて(枕)十 北の陣のかささまあゆむく(狭)二 下 下さまやと見ゆる方

さまよつたひより給ふ

かたぎ(夫) 卅六(新六) 二 爲家 「りたぎこるたづきの斧のえとよわと思ひきられぬ世
あそつらとれ(頼政集) 下十 「あふ事の猶もかた木のきりえねばことのもよき何
よりせせん

補かたぎ 形木(東鑑) 寛永四年 百部摺寫法華經 云々 形木則以後勅筆被彫之

りたぎ 難カマシの所に附す

かたぎ 敵(うつほたつの村鳥) 九親の時より敵ありと申をよよりて少將のかたぎせ
給へるあり(源神) 廿 「逢ことのかたぎせけふにかぎらぬ今いく世をりあきつ

つへん 契冲宣長共に敵をか(枕) 三、まいておとがひをそく愛ぎやうおくれたらん人
ねたる也といへり 七

のあいさうかたぎよしてお前よきへあう啓をる 補(源手習) 五十りたぎごちたる
人もあるやうよおもむいて

のこき 相手也 碁双六競馬にも万にわたりて又男女の中の事よも(左傳桓年) (源葵) 十
齊非我敵魯の太子お齊の女を嫁せむといふ時也アヒテのこゝる也

ものへけとてもわざとふりき御かたぎと聞ゆるもか(枕) 五、十二問答の かたぎよ
えりてもいかでかさる事いあらん(信明) 卅四五月のせちにやあ 「のたぎかく思へ
る駒よくらぶれを身にそふかけのおくれざりたり(源寄生) 六 碁はん召出て御碁の
かたぎよめよす(枕) 八、うらやまよき物双六うつよかたぎのさいき、たる(榮玉

の村菊) 三 あれくれをせぐるくりたぎよおぞ(うつほ 俊蔭) 中 おうかひのかりく
し給ひをおうかひをやうよりさい見奉りつれどさもえ聞えざりつるありよ御か
たぎとバ知り奉らトいつよりか御ながれいやと給ひ(同 藤原の君) 九 大徳のいふ
やうりこきを得んるやうの比叡の中堂に常灯を奉り給へ(同 藏開) 上六宮づり
へし給ふ人いりたぎおるあそいよれ

○あそふれがたぎ(源紅梅) 四たの部 あそびがこき(源若紫) 卅(同句宮) かの部
かたぎぬ(万) 五、廿九 布かたぎぬありのおとよきそへども 云々 綿もあき布か
衣のこるのとわへけさされる(同) 七、十六、もふあがまのゆふかた衣ひつり縫き
かたぎ(片岸) 拾遺 戀四よき 「りたぎの松のうきねと忍びいひさればよつひよ
あらわれよたり(六帖) 「行水のかたやのゆるかたぎの松のくるき物よぞあ
りける(顯季) 「松の木根あらわれぬわが戀人の心のりたぎをかれ(同) 「わ
ぎもあの木曾のりきちよまそねど何あふ事のりたぎをらん 補(万代) 夏二品親
王覺性

「五月雨よ川のたぎのふし柳ふるくかけたるもくつりくれぬ
かため 片目(狹) 二、下五 片目あしき僧の(夫) 卅四詣寺 「どがみるりよめよいもが
みられつゝいづらの心きよ水の瀧 補(枕) 八、十二、いかでりよめもあきつかうまつら

あへて君もこゝかは(後) 二春中よみ 人しらす (伊勢)「さくら花色のひとしき枝なれどこの
とよみれをかくさまなくに返し「見ぬ人のかたみがてらのせらざりき身にかせら
ふる花よあらねバ(古) 四戀 (伊勢物)「かすみこそ今のあさかれこれなくばわさる
るときもあらまゝ物ぞ(續後撰) 秋中「いよへのかたみとなしの月のいろもみそぢ
くれぬる秋ぞかかき(方) 九卅「いそはとつありそよのあれゆく水のそぎよ
い妹が方見とぞこ(同) 十五卅六「まをかぎまかけてあぬべとまつりごまかかみのも
のぞ人よしめまか

○りたみのいろ 二かすみどころも 三かすみのみづ 右別よ出せ

かこ籠 (和名) 八十六 笠箒 加末 (伊勢物)「かどてかくあふまかかみになりぬらんみ
づもらさどとむまびいものを(後撰) 戀「うれしやよ君がたのめいことのものかこ
にくめるみづにぞありなる(同) 春上よみ 人しらす「君のまやのべよ小松をひきよめくわれ
もりかみにつまんわか菜を(源 早藏) 三「此春のされよりみせんあき人のりかこ
つめる峯のさわらび(夫) 卅二正治 百「賤の女がかかみの庭のむかしくておいぬ若菜
よひのせとぞつむ(新千) 哀傷元 良親王「きみをまとうつゝにみめやあふことのかたみよ
もらぬ水のありとも(補) 金葉 戀下よみ 人しらす「あふ事れ今のりかみのめをあらみもりて

かかれん名こそをいれ

かこみにニガガヒ (後撰) 戀 (伊勢)「あふとごよりかみに見ゆる夢を忘るゝほど

物(拾穂)本

もあらまゝ物ぞ(新勅) 戀五 相摸「われもおもひ君も忍ぶる秋の夜のかこよ風の音を

身よむ(うつは) 國讓 八下「我と君といといとくちぎりさる中ぞりかこよ打め

るさんとぞいひさると(同) 初秋 二上 卅 深き心いひ契らせのこよあそれからん事

を心とめて打いさせ 云々 (同) 卅四角 十二 番までこなたのなにかたよにちま

けし給ふ(源 帚木) 六 十 りかこよをむきぬべききさみよかん有とねさやいふ (伊勢)

「あふ事のりかこよこゑのたかゝらば我をらねども人のきかかん(後拾) 元「ちぎり

さかかこに袖を忘りつゝ、そゑの松山をこさどと(堀百) 常「あふ事のとど

えがちよもあり行りかたよにのよへまの、つぎせ(補) (新古) 別 定家「わさるかよや

さる袂のりさるともかたよにのりるよその月影

りかみどれ(新六) 五 知家「ふりかくるひたひの髪のかこみどれとくとこのむるはふ

のくれりか

かここのいろ 喪服を いろ い の部に (狭) 三 下 十四 源氏 皇太后宮の御かたこの色

よやつれさせ給へる頃まで

かたこのくし(夫)廿二「君にやるりたこの櫛のわかれぢの神よまかせていのれとぞおもふ」

かたこのころもたいのこし（方）四、五「わぎもこがかたこの衣をたよきてたゞよあふまでいわれぬがめやも」おきし服也（方代）秋上「立をむるまの秋風こゝろせよかこの衣まどひとへかり」

りよみのころも喪服を（玉葉）雑四母のてに服ぬ「いまいとてかこの衣ぬぎまて、色のむるべき心ちよせせね」

りよみのみづ此二首ハ形見也籠の下ハ出せるイセ物（新古）戀入道攝政久しくまうでこざりたる頃鬢りきて出けるゆゑるつきの水いれながら侍りけるを見て道綱母

「絶ぬるか影どよ見えばとふべきをかこの水のいとくさるまなり」戀五中務卿親王（續古）

「今のまよ影どよ見えぬうき人のりよこの水の涙かりなり」

かよみ片耳（源柏木）十二見「かばかりゆゑ、よきままでにおもてまをせとうつくしと聞ゆれば女三片耳に聞給ひて」同（維か本）廿七「いとめでたかるべき事かかとりと耳よ聞て打ゑむ女をらのあるを」

のよ片く也俗よ（うつはめて宮）廿三「うへの袴をのへさまよきかよよ足二ツをさし入れて」同（くつろたさうがい草）のよよきびをばをかにまきて同（藤原君）をよ給ふ屋の三間のりや屋りよの土あまこれとよ云（小大君）廿三、又此頃物へゆくどて

「わかれゆくりたの道におく霜のきえん雫よ袖やぬれなん」枕九、十「黒箱のふたもかよよおちさる」抄「まきえせぬ黒ぬり硯箱のふたの片々のけさる也」

りよ難（源桐壺）十八「人目をおやしてよるのおとよよいらせ給ひてもまどろませ給ふ事りた」土佐日記「子の日の事いひ出て松もがよといへど海中かればりよ」

かよ枕四「男も女も法師もちぎり深くてりよらふ人の末まで中よき事かたよ」古秋上「秋ならであふ事かたよき女郎花天の川原におひぬものゆゑ」源桐壺廿「なぞら買方」

ひよおやさるよよいとよよき世りかと後撰六「心ざし侍る女宮づかへ侍りはればあふ事かよくて侍りたるよ」源常木四「御覽ト所あらんこそかよ侍らめ」夫

十一よよ人しらす規子内親王家云々「小男鹿のよどく禁の下萩の露おくことのかたよもある哉」此歌順集よもある源常木四「女のこれのよもどかんつくまよきのたよもありけるかよとやうか」

よかん見給へる源若紫廿「時ありてよよびひらくあるのかよかある物をとの給ふ」同（須磨）卅「都をかれて後昔をたよかり一人々相見る事かたよのみなりにたるよ」同（よとめ）六「かかき親にのよよき子のまさるよめよいとかたよ事よかん侍

よかん見給へる源若紫廿「時ありてよよびひらくあるのかよかある物をとの給ふ」同（須磨）卅「都をかれて後昔をたよかり一人々相見る事かたよのみなりにたるよ」同（よとめ）六「かかき親にのよよき子のまさるよめよいとかたよ事よかん侍

よかん見給へる源若紫廿「時ありてよよびひらくあるのかよかある物をとの給ふ」同（須磨）卅「都をかれて後昔をたよかり一人々相見る事かたよのみなりにたるよ」同（よとめ）六「かかき親にのよよき子のまさるよめよいとかたよ事よかん侍

れバ(同 浮舟)十一とろさき事をりとわがいせん事ハバかりてんや(同 せとめ)

二史記のかたき巻く(れうしうけん)に(同 紅葉賀)十かたきてうしどもをさぐ一わ

さりにからひとり給ふ(同 蜻蛉)五十六女の心かたい物か人(の心)と思ふにつ

て(同 若菜)十九琵琶の例の兵部卿の宮何事にも世にかさき物の上手におそいてい

とよあ(枕)十一、六兵部といふえせありさまもことある事あり(すぐれたる 兵部と

てをうしき方などもかたきがさきが人などよさ(まどり心)かどのある(補 伊

勢物)「さくら花はふこそかくのよふらめあなとのとがたあそこのよのこと

附 かさき 心前のよ同し心やす(源 東や)九 十あをあさてかさき物いにて侍るを

補 かたきこと (源 榎柱)廿とこの君いとほしとおぞてかたきことかりおのが

心ひとつにあらぬ人のゆかりよ云々此かたき事ハ難義

りさ(源 行幸)廿かさきいそほも淡雪よあ(給ふべきみけしきなれを(同 帚木)

一廿さるよよりかたき世ぞといさぶめかねたるぞや(トキハニカタキ 世ニアラズト也)

附 けたく (散木)中六「くることよあひづの關もわれといへバかたくあてもぬ

らそ袖かなりたく争ふ(ナドの類かたくの所にいたす)

か(源 帚木)三あまりうるのしき御ありさまのとけがさく(同)四十 ながさ

補 かたきこと 堅炭 (拾玉)四「かさきこととあさうづむ火の消あくよ霜よまうせて

明るをのゝめ

りさ(源 東や)卅「見一人のりさ(ろ)から身よそへて戀しきせむのあで

物よせん(形といふ) (狭)中五 あらふる神もことわり知給ふわざよ侍るおれば

にやとい思給へながら中く(さる)ろとこを見給へ(か云々)いかで御鏡の

かたに御らんとくらべさせんとて打や(えと給へるを(狭)四)中十一 姫 齋院よぞい

とよく似奉り給へりけるた(あながちある心の内を哀と見給ひてかゝるか(ろ)ろ

を神の作り出給へるよやと覺よるよも

かたろ(和名)廿三白草(和名)廿三 葉上有二黒點古人秘之隱黒爲白耳

私記云堅鹽(万)五、廿さむく(あれば堅塩)ととりつゝろひ

木多師是也(九) 貝のかた(夫)廿七建保三「いせ島やふさみのうらのか(ろ)貝あ

で月日をまつぞつれなき(同)同家 「さても又猶あふ事(ろ)貝あらびふても

かたつけな

俗ノ勿タイナシ恐レオホキコアタレリ、スベテ高貴ノ人ニ下賤ノ身ノ相對スルコト故チンゴロナルガ、ウレシク有リガタキト聞ユルモアレド

イフトハカハレリ(續紀) 卅二天下百姓能念良麻恥志賀多自氣奈志(神代紀)下今者

天神之孫辱臨我處(靈異記) 中我願以何潛天女專自交之媿不語他注潛カタシ(遊仙)

慙荷不勝(續紀) 廿七夜晝不退之護助奉侍平見禮可多自氣奈奈念須ケナシ契沖ハ雜記

ニとづかーやさーかたつけな此三ツ同シ心ニテ歌コハカタシケ(堀初) 師時「か

けまくもりたつけあきひちまやふるかとのとあれはあふひかりなりリア(落くる)

ひさーふた間曹司よひえたりければおあやうある所なりたつけなとて落くる

一間をまつらひてかんふーなる(同) 四かたつけなくともこゝにわたらせ給へ

(うつほ 藏開) 中、卅三たまひりし帯何辱く御心ざーあらん物をさ節會をどよさ

して御覽せさせ給へこゝにひさゝぎとも(同 樓の上) 四卅宮の御方の院のとりわき

て思ひ聞え給ひて折くも聞せ給ふらんとかたつけな(源夕顔) 五まいていと

おもたゞくあづさひつうまつりん身もいたさうりたつけなくおもほゆべ

かめれをまじろ涙がちあり(同 若紫) 卅六かくかたつけあきかけの御ことのそ(同

蓬生) 十侍従出きたりかたちなどおとろへまけり年頃いたうつひえたれと猶物きよ

たよよーあるさましてかたつけなくともどりかへつべくとも(同 薄標) 卅一どくる

いさまさり侍かたつけあきをそやわたらせ給ひねとて人よかきふせられ給ふ(同)

卅院より御けいさあらんをひきたがへよことり給せんをかたつけあき事とおぞ

(同) 卅二やうく御心まづまり給ひての自りらも御かへりかき聞え給ふつゝまう

おぞたれと御めのととどかたつけなとそゝのかし聞ゆるかりけり(同 夕霧) 十

故大納言のいとよき中よて云々いとあやうかんかたらひ物し給ふもりくふりそ

へわづらふをとふらひよとてたちより給へりけれをたつけなく聞侍りき(同 玉

葛) 卅あかづらひうをるもりたつけあき事をりとて(同 蜻蛉) 四いりある事をかく

いふぞとあかいせよ云々との給へばいとほき御けいさもかたつけなくてゆふつ

らためく(狭) 二、下五かゝる物の苔の衣にうさね候せんいとかたつけなく侍るべ

し(源 檣柱) 卅三いりでか聞ゆべきとおぞかやむもいとりたつけなくと見奉る(同

明石) 三まづおひそらひつべき賤のをのあそれまむつまうおぞさるゝもわれなが

らりたつけなくくりにける心のぞと思ひらる(同 小蝶) 三殿の御けいさのこまや

かよりたつけなくもおそさまをりか(同 句宮) 二光りりくれ給ひ後かのみりけに

たちつき給ふ人そこの御末く有がたかりなりおりの帝をかけ奉らんり

たつけなうたうどの三の宮(源 橋姫) 十御けそひ顔りたちのさるをほく

心ちよもいとめでたくかたづけかくおぼゆれば(同 東や)六此數ならぬ人せさへか
 んかの辨の尼君にの給ひけるさもやと思ひ給へよるべき事よ侍らねど一もと
 故よこそいとかたづけかければ(同)三かたづけかくよろづにたのこ聞えさせてお
 ん猶志をくくさせ給ひて云々數侍らねともおぼゆそかたせ何事ををもをへ
 させ給へ(同 浮舟)九四十宮の上のかたづけかくあされにおぼゆりも(同)同大事
 とおぼゆるよりかたづけかけれをさらばと聞えけり(同)七六十いとくおぼゆら
 ておぼゆぬ云々右近がせぎの名をよびてあひたりいとわづらひいとくおぼゆ
 更よこよひふようかりいとくくたづけなき事といせせり(同)同とのるにあ
 るものどものさかかがりたたる頃までいとわりなきおまへよ物をのとい
 とくおぼゆさめるのかゝる御事のかたづけなきをおぼゆとざるよこそいと心
 ぐるくかん見奉る(大鏡)二大方其一町の人まかりあるかざりき今のあやさも
 のも馬車よ乗つゝとあるき侍ることよむかしのあらひよいとかたづけか
 くこそ見給ふれ(源 桐壺)三いとそたなき事おそれとらさしなき御心をへの
 とくひなきをたのこよてまたらひ給ふ(同)三十身よあまるまでの御心さりの万よか
 たづけなきよ人けなき恥をかくつゝまたらひ給ふめりつるを(同 蓬生)大將おと

おそいまよりよふ御をくせのそとをかたづけかく思給へられかばかんむつび聞
 えさせんもそくかる事多くて過侍りつる(同 葵)二ちひろといそひ聞え給ふを
 少納言あそれよりたづけかきと見奉る(盛衰)八十宸襟一づかからせたりんを
 一ぱりかたづけかき(同 玉葛)二四十御心おきてのこまりよありがたうおそいま事い
 とかたづけかき(源 東や)三あそれよかたづけかくおひ出給へをあらしく心くる
 一き物よ思へり(同 柏木)八おくるへうやのとばかりあるをあそれよかたづけかき
 と思ひ給ふ(榮 初花)十かの院の御供の僧ども天上人をと祿とらせでいりてか
 とかたづけなからん(長門本平家)二これのちら山住僧の一さい衆生のち病の藥
 のよめよ出給ふところの出也かたづけなき所に馬をいりて洗ふことらうせき也
 とせいでくはふ(補 榮 月の宴)いかにいひつと申たまふぞそれにかたづけなき
 人をときこえ給へ(源 須磨)九廿いまよいとそらうのたづけなき物おもひきこえ給
 ふ(御息所 狭)四下うちかりせたまふをいとらとづけかく哀れよおぼゆめさる(著聞)
 十六かたづけかく少人たちの御使を給て候をりふ(同)十七廿九今らとづけかく御
 勘氣よあづかり候事

かたづけ 片鋪の衣袖に(新六)一行家「床の上にあやめのわか葉かたづけきてねをこせ

ねそやよそのとトかき(新千)冬よみ人しらす「川風の吹上のもち散とどれかさきか
ねつうちのはし姫(古)戀四よみ八しらす「さむしろに衣かたさきこよひもやわれをまつら
んうちののはし姫(鎌倉右大臣集)下「旅ころも袂かたさきこよひもや草の枕まわれ
獨ねん(源浮舟)卅 かさく袖をわれのと思ひやる心ちいつるを(同 總角)五十一申

とえん物ならなくよはしひめのかたく袖やよはぬらさん(後拾)戀三「さが袖
ま君りさぬらんりら衣よかしくわれまかさかせつ(新續古)戀五「とへがくを涙
の床まふしわぶるわがかさき袖のうら波(狹)四十八「かさきよりさぬぬ衣打
かへしおもへば何ぞ戀ふる心ぞ(夫)卅一知「かさき床の初露いろよ出てよあ
よなさめる衣手のさと(新古)秋下後京極「きりとりをなくや霜夜のさむしろに衣か
さきひとりかもねん

かさく(夫)十八寂「ふる雪まのきばかさく山木の落る梢まあらさくか
り(同)同後京極「ふる雪ままがさかさくれ竹の庭のふしどり下氷つゝ

かさく(清正)「くらま山くらくこれと時鳥りかさく聲をそれとをらぎや
かさき是の片尻切にて片足「うつは藤原の君繪のばくち京わらへ車うはひ
さりこの君かさきりして車にはしりのり給へり

補 うさきころも(續古)旅前内「いはれうへよりたさき衣たゞひとへかさねやせ

ましとねのしらす雪

かさき片笑(源 帚木)廿君すこいかたきみて片顔よ笑
かさき帳におろしたれ(和名)十四帷和名加圍也以自障圍也(遊仙窟)兩頭安綵幔
(源 帚木)廿ひさあぐべき物のかさきなど打あけて木丁(同 若菜)四十御几帳のりさ
びらひきおろし(同 空蟬)七もやの几帳のかさきひらひきあぐて

かさき是の(宇治拾)十四うさきびらばかりきて中ひて(夫)卅(新六)五「い
かませんかさき布のかさきより身をかきべき物とやのる補鈴屋翁云りたび
らとの今の世に布の衣とのいへどもとさよのあらを裏なく一重なる物を何よ
まれかたきらといふ也

かたひく方引(枕)十一男も女もはちかき人をかさき思ふ人のいさゝかあさきこ
とをいへをそらどちかどをるがわびしう覺ゆるかり(新撰)信實はじ「春よのこ心
かたひく梓弓おしてや夏のけふのきぬらん

かたひさ片膝(かたろふ日記)三太刀とくとあれば大夫とりてそのこにりさひさ
つきこてり

かたびさし片庇 (夫) 七法性寺 賤の屋いもと蓬のたびさしあやめをかりせけ

ふいふりかん(同) 卅一 家「あを戀してやの戸出りさびさしひさしくねを面り々

ぞたつ(同) 同常磐井入 道太政大臣 「山里の柴のかた戸の片びさしあたは見ゆるかりの宿哉

かともなく(源蓬生) 十 七りともなくあれさる家のことちあはく森のやうあるをまぎ

給ふ(枕) 三 十いろくまみだれ咲たり花のあたもあくちりたる後云々

補 のともえ 片燃 (能宣集) 「よもをがらかともえわさるのやり火よこひさる人によ

そへてぞ見る

ろくそと 片隅 (源明石) 四十 ああゆゝやとてろくそとよよりあるり(同 檣柱) 九今

いあか今めかき人ぞわたしてもてのうづかんかともみよ人わろくてそひ物し給

もんも人聞やさしあるべし(今物語) 十 東山のあともあそれよ人もかけ見ぬあ

ばらやにいとやさしくいまた人かれぬ女ありり補 (源 檣柱) 廿 さてあともまか

くろへてもありぬべき人の(著聞) 六 廿父の入道かともまよ引入て居りけるぞ

かれ 彼 俗のアレ也但雅言に (源 浮舟) 卅 七かれ見給へいとそりあはれぞ千とせもふ

べきみどりの深さぞ云々(枕) 一生昌 かたいらある人ぞおこしてわれ見給へる

みえぬものあめるをといへ(同) 一 翁丸の所藏 人犬をさして かれ見侍らんといひさればあかい

とどさる物なるといそれを(源ととめ) 卅 五たゞ此屏風のうしろまたづねきてあは

くかりけり云々哀もそこさむる心ちしてめさまかれ聞給へ(同 柏木) 六かれ聞

給へ何の罪ともおぞしよらぬよ云々(同 夕顔) 一かれ聞給へ此世との思ひざり

なりとあはれがり給ひて(伊勢物) 六 草のうへにおきたりける露をかれ何ぞとあ

ん男にとひける(源蓬生) 十 九かれいたれぞ何人ぞとふ(同 桐壺) 廿是人のささま

さりて思ひをいめでたく云々彼の人もある聞えざり(同 帚木) 廿今やうく

わそれゆきまよりれいさえも思ひをかれ(同 未摘) 卅 三ありいろあひをわろ

いとや見給ひけんと思ひあはれるれどかれの紅のおもくかりを(枕) 八 う

らやまき物あれがやうに云々かれが身よ只今をらとやとおぞえか(後拾) 下 秋相

摸公資よわせられて後かれが家にまかれりけるよ云々藤原 經衡 **補** (宇治拾) 十 僧のまへ

に出来てついで云々僧正かれ何ものぞと問けり

かれ 本語ハカルナルベシ 俗に痘瘡也 (榮 峯の月) 廿 四あんのとの御かさかれさせ

給ひつれど

かれ 枯の所へ出せ

かれいひ 餉 (和名) 十六 飯餅類餉加禮比 俗云加禮 以食遣人也一云可例比波奈之爾 (新

六)六 行家 「いくばくの道行つかれやをむらん椎のせせき旅のかれいひ(万)五、廿一
常志らぬ道の長手をくれくどいりにかゆかむ可利豆のあし(古) 旅ふさみの浦
といふ所にとまりて夕さりのかれいひ(いせ物)九 九かれいひくひけり(榮 玉の臺)十
かきいひかといふ物をめい出て池なり木どもひくものになまふ(新六) 五乾飯 「志
をいどて山井の水をむむびつゝかきいひのつとどとりぞ出つる
七

かきばと 枯の所へ附をかきがさかきぬくかどの類も同くカルの所へ

かきと 枯葉 (新千) 冬 露ちり庭の淺ちふ風さえてかれそにさむき霜のいろか
な(堀後) 猿 顯仲 「あさまさきからのかきとをそよく外山を出てまらなくあり

(新後拾) 冬 爲重 「あまそえやあーのよあく霜こほりかれそをたれて浦風ぞふく
りきと(狭) 四下賀茂の行幸の九月晦日かれ野邊の草ども皆かきとにあり
て道芝の露ばかりぞ見いにかそらぬ心ちいける(源夕顔) 四十 おまへのせんさいの
おまがれよ 草に いふ

かれと 歌に草をか(續古) 戀五中務 卿親王 「まくせ原うらみ頃秋風やかれとよ
ある始めかりけん(六帖) 六 「思ふとちあるどま秋のわびいきを草のかきとよある
ぞわびいき(源帚木) 廿二 うち頼むべくも見えぬかれとよのを見せ侍る程よ(同夕顔)

八かれとよとどへおかんをりこそい(万) 十三 「夢のとも思ひわかめや月久にか
れに君がことのかよへ(補) 拾 雜秋 義懷 「山賤のりきやわたりをいかれぞと霜りき
かれにとふ人もあー

かきがと(後撰) 戀三 三 うれがたよ成ける男のもとよ装束調へておくりけるよ
かれがと(宇治拾) 十 またあまものう候といへばそれがいかにかきとといふ
かれがと(古) 戀三 小町 伊勢物語 「さるめかき我身をうらと志らねばやりれがとあまの足た
ゆくゝる(新勅) 雜四 知家 「あさぢ山色かひりゆく秋風よかきがと鹿のつまぞこふらん
(新千) 夏後白 川院 「さちばあの花の宿とふほとぎをかれがと今も昔こふらん(新拾)
戀四 經宣 「あしためくゝるてふあまよことゝいんりきかでのこるさるめありやと
(續千) 秋上 爲相 「天の川水り草のいく秋かきをせと一のひとよまつらん(新後)
長教 「つらかり秋の別よつきをくもかきかできくの何のこるらん

かれの(玉葉) 冬 西行 「花よおく露よやどりかたよりもかれの月あはをかりけ
り(月清集) 下 「このもちりて後いむかきと山よりかれの草よあらおつかり
(拾玉集) 七 「終よさいいづちきめべき身あるらんかれの露を袖よのこして
かれの(應神紀) 二十 三十一年秋八月詔群卿曰官船名枯野者伊豆國所貢之船也是朽

之不堪用然又爲官用功不可忘何其船名勿絶而得傳後葉焉群卿使被詔以令有司取其船材爲薪而燒鹽云々初枯野船爲鹽薪燒之日有餘燼則奇其不燼而獻之天皇異以令作琴其音鏗鏘而遠聽是時天皇歌之曰云々

かれ〇明阿曰草木のかるゝそのともいそむ虫あとのほゝとるをいふなり呂覽草のりるゝと死とかけるよてもあるべし（中務集）蛙のかれたるを「うれにけるかむづの聲を春たちてあせかあけぬとおもひけるか返し」これかゝくからせおきてはゝのびけんよみかへるてふ名をやとのと

うれ（貫之）六「思ひあまり戀しき時の宿かれてあくがれぬべきこゝちこそをれうらま爲離（拾玉）一「住わぶる山ざとからそをとゝぎをとおとなく音もあはれをひけり

かれひけ標子ワッ（和名）十四蔣鮎切韻云標カ委漢語抄云標子加禮今按俗所謂破子是破子讀和利標子中有障之器也比計

うれふ枯生（夫）廿二「風さゆるふとのそを野のあさざらけかれふの尾花雪かどぞ見る（同）同「淺芽原かれふの小野の草のうへまどる色かくつもる白雪

かれこれ彼是〇物にも人の（古）序よめる歌おほく聞えねばかれこれをよそしてよくしらせ（土佐日記）うれこれたるしらぬおくりそ（源處女）十あそびの方のさえの猶ひろうあせせかれおれよかよそ侍るこそかよおけれ（後撰）春春のくれかれこれ花をいみける所よて

かれこうトうつは（藏開）中四歌云々とかきて折りてさゝれたりいもみちのかれこうトさるよつけて出されたり

うれ志枯柴（夫）廿九行家卿「うたの野やかれいばくれふを鳥のとびさつをりふるあられ哉

かれひ（和名）十王餘魚とせりされど王餘魚の鱠殘魚よてうれひの比目魚かりといへり

かぞ（仁賢紀）十鹿父鹿父人名也俗呼父爲三柯曾一カソコろぞいろ（神代紀）上廿父母既任諸子（日本紀竟宴歌）朝綱「ろぞいろのあせれと見せやひるの子の三とせにかりぬ足さゝせいて（夫）卅五家集匡房「かぞいろのいかよあせれと思ふらん三とせよかりぬ足さゝせいて案する此夫木の歌二三（同）卅（新六）

ろぞいろ二「かぞいろのみゝ世の花の衣手よかけきやりゝる墨染の袖（袖中抄）九かぞいろのいかよ云々夫木と同一かぞといふいと母をいふ日本紀に所々よか

くいへり古語拾遺あれよおと綺語無名童蒙抄皆かくのでとくいへり然とも俊頼朝臣歌云「郭公かかくぞいろのうらひをみまればよなくてふことなならひそ○或人難云ひがことよめり父とバかぞといひ母をさいろといふとあるかいろはといふべきかり○今案よひがことよめり日本紀等よいかその父いろの母といひされど万葉集よいかぞいろとのよめり以上袖中抄(散木)上、「子規かかそいろの鶯よまればよなくてふことなならひそ

かぞいろは(應神紀)十有戀父母之情(千載)春上「四方山よ木のめ春雨ふりぬればかぞいろはとや花のたのまん(夫)三「春雨を花もさよそののむらめそく、みたつるかぞいろはよて(同)同「さかふべき四方の草木のかぞいろは此春雨や世にあふるらん

かぞへのうち(落くぞ)一十三石落くぞの君かぞへの内よごよいらねを(源玉葛)廿六ことよ出ての何かのかぞへの内よの聞え給せん

かぞふ(新六)五「かぞへもつ日數をりりを身にそへてをる手もよめりあひぬたえまの(万)十三「ひとりぬる夜をかぞへんとおもへども戀のうきよ心ともか(源帚木)十一「手をりりてあひこし事をかぞふれば(同夕顔)十「あまがくれば

と數へりの(同海標)四五月五日よぞいりよのあたると人忘れかぞへ給ひて(千載)上「りぞへりる人をりりせさいとづらよ谷の松とや年をつまへり(源若菜)

上冊年月の行へもいらせ顔あるぞかうかぞへえらせ給へるよつけての(紫式部集)「あつたづのよそひあらばせべらぎの八千代の數ものぞへとりてん(源若菜)上冊人よりことよかぞへとり給ひけるけふの子日こそ猶うれさけれ(同寄生)四宮の若君のいりよかり給ふ日かぞへとり給ひて(同)冊されどくわしうのえぞかぞへた

てざりけるとや(拾玉)三「ねぬよその數のいくらかつもりぬるかぞへてもよそぢのそりき(拾遺)戀四「思ひきやあひこぬる年の月をかぞふ斗にあらんものとの(同)雜(貫之集)「かぞふればおやつかかきを我宿の梅こそ春の數の(拾)を拾

補かぞふ(詔詞解)八廿掠の加蘇比と訓べり十九高御座次平加蘇比奪ロ

りぞけき(夫)十六霜「浪の花のなよはの蘆の霜がれよ音のかそよき浦風ぞふく判者行家云おとのりぞけき一かたとりりて聞え侍れどいたく耳遠きりよやをぎ侍らん(万)十九ぬふ月夜可蘇氣伎野邊遙々爾暄霍公鳥(カスカナル)補(万)十九四「わがやどのいさゝむら竹ふく風のおどの可蘇氣伎このぬふべりも

增補雅言集覽卷之十五終

增補雅言集覽卷之十五終
（以下為正文內容，因字跡模糊，具體文字難以辨認，但可見其為多行排列的漢文或日文）

